
朝な夕なに

日比谷碌樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朝な夕なに

【Nコード】

N5782J

【作者名】

日比谷碌樹

【あらすじ】

平凡な女子大生、梓沙はある日、実家を出て一人暮らしをしている年の離れた兄・一志からクリスマススイブに会って欲しいと懇願される。怪訝に思いつつも承諾し、当日、彼と食事をする梓沙だったが、その後なぜかラブホテルに連れ込まれ、その上バスルームで一志から衝撃の告白を受けてしまい……禁断の純愛インセスト。

INTRODUCTION

青いはずの空が白くけふる季節。三月になった。じきに約束の日が来ようとしている。いや、もしかしたらもう訪れたのかもしれない。

確認する気はあたしにはない。そうすればあの子はきっとあの人の子どもになれるから。あたしが勝手をする事で、彼らは怒るかもしれない。……でも、あの二人ならわかってくれるだろう。

車に乗り込み、キーを回し、アクセルを踏み込む。行き先なんてどこでもいい。というより、もう決まってる。

さくら さくら

やよいの空は

見わたす限り

かすみか雲か

カーラジオから聴き慣れた旋律が流れた。洋楽のグループがイントロ部分にこの古謡を使った曲だ。なんとも不思議な声だった。まるで子守唄みたいだ。あたしは促されるようにして口ずさんだ。

さくら さくら

やよいの空は

見わたす限り

かすみか雲か

いざや いざや

見にゆかん

ハンドルから手を離し、目を瞑^{つむ}った。
最後にあの人の顔を一瞬だけ思い浮かべた。

CHAPTER 1 衝撃のイブ（前書き）

テーマはあくまで純愛ですが、近親相姦描写が多く出てきます（本番行為はありません）。

その手の表現が苦手な方はブラウザバックをお願いします。

CHAPTER 1 衝撃のイブ

いまでもはつきりと憶えてる。クリスマスイブの十日前、例年のシーズンより少し早めの寒波のせいでマンションのベランダが真っ白になった日、都心のアパートで一人暮らしをしている兄の^{ひとし}一志からの電話が鳴った。熱いココアを淹れようとしてキッチンに立っていたあたしは、慌ててコードレスの子器を取ると耳と肩の間に挟んだ。ディスプレイには発信者の名前が表示されるので、出る前から彼だつてことはわかつていた。

「はあい、もしもし。お兄ちゃん？ めずらしいね」

一呼吸置いてお兄ちゃんの声が聞こえた。久しぶりのせいかな、なんとなく他人行儀な感じがした。

『……梓沙^{あすか}か？ 久しぶりだな。元気だったか』

「うん、まあ。お兄ちゃんこそどう？ 最近全然帰っても来ないけど。忙しいの？」

あたしはポットからマグカップにお湯を注ぎ、スプーンでココアパウダーを手早くかき混ぜながら訊ねた。なんだか声に覇気がない。仕事がよくばどハードなんだろうか。

『ま、な。それよりもさ——お前、二十四日って空いてないか』

あたしはきょとんと訊き返した。

「は？ 二十四日？ って今月の？」

『そう。予定あんの』

「んー……ちよつと待って」

戸惑いながらも携帯電話を取り出し、カレンダーを確認すると、その日は……ああ、合コンだった。七時から、某居酒屋チエーン店で。そう答えるとお兄ちゃんの声はあからさまに曇った。あげく、こんなことを言い出した。

『それさ……キャンセルできない？』

「はあ？　なんで？」

お兄ちゃんは黙り込んだ。しばしの沈黙のあと、口ごもるように歯切れ悪く切り出した。

『色々事情があつてさ。その……会って話したいこととかあるし』

「事情？　つて……なら家に帰ってくればいいじゃん、お父さんも待つてるし」

『いや、親父に話があるわけじゃないから。とにかく一対一^{サシ}で会いたいんだよ。——ため、かな』

妙に逼迫した口調のせいで、あたしはついほだされてしまった。

しょうがない、ほかならぬお兄ちゃんのためだ。

「わかった。了解^{オッケ}で、どこ行けばいいの」

『本当か？　まじで？　……サンキュ、梓沙。すげ嬉しい』

電話越しでもお兄ちゃんの声が震えてるのが伝わってきた。正直わけがわからない。時間と場所を指定され、通話を終えてから、あたしはひたすら首をひねり続けた。

あたしは菅谷梓沙^{すがや}。十八歳。都内の私立四大に通う一年生。容姿も成績も中の中、はつきり言つてなんの変哲もない、超普通の女子大生である。高三の冬に付き合つていた同級生と別れてからはずっとフリー。ちなみに処女。つてまあ、そりゃどうでもいいことだけだ。

そのあたしの兄、一志はあたしより十歳も年上で、某大手広告代理店の営業マンをしており、現在は府中にある実家を出て都心のアパートを借りて一人で暮らしている。うちのお母さんはあたしが二歳の時に病気で死んじゃったので、仕事に忙しいお父さんに代わり、乳幼児だったあたしの世話はほとんどお兄ちゃんがしてくれた。あたしは実質お兄ちゃんに育てられたようなものだ。だからいまでもお兄ちゃんの頼みごとには弱い。

そんなわけで二十四日当日、あたしは急ぎ足で待ち合わせ場所に向かっていた。髪が中々巧くまとまらなかったせいで十分ほど遅れてしまったのだ。駅前にはすでにお兄ちゃんが待っていた。あたしは慌てて走り出した。けど、履き慣れないハセンチヒールのせいでつんのめり、思いきり転びそうになった。

「——つぶねえ。お前、ほんと直らないな、そういう粗忽なところ」
間一髪で抱きとめてくれたお兄ちゃんが呆れたようにそう言った。あたしは頬を膨らませた。

「うるさいな、ほつといてよ。そもそもお兄ちゃんが気合入れた恰好してこいっていうから遅くなっちゃったんだからね」

それは本当のことだ。お兄ちゃんは電話を切る際、思い出したようにそう付け足した。さては高級店に連れてってくれる算段かと思いい、あたしは年に数回着ることがあるかないかってくらいのサテンワンピースを引っ張り出し、ビジューのついたピンヒールのブーツを用意した。そして相当時間をかけて盛り髪にチャレンジした。そこまでは良かったのだけど、普段ほとんどこういうことはやらなただけにやたらに手間取ってしまい、家が出るのが予定より三十分も遅くなってしまったのだ。

機嫌を損ねたと思ったのか、お兄ちゃんはいつになくやさしい口調であたしを宥めた。

「ごめん、確かなな。でもすっげ似合ってる。可愛いよ。最初誰だかわかんなかったくらい」

あたしは噴き出した。「そこまで言う？ もういいよ、怒ってないから。ていうかあたしより、お兄ちゃんさすがだね。大人っぽいっていうか、恰好いい」

あたしはまじまじと彼を眺めた。細身のダークスーツをさらりと着こなし、その上に漆黒のカシミヤのコート。少し長めのこげ茶色の髪がなんとも色っぽい。そう、昔から知ってたことだけど、うちのお兄ちゃんは恰好いい。そこらのアイドルとか俳優なんかには全然負けてない。死んだお母さんの写真を見るとお兄ちゃんにそっく

りの美人だから、お兄ちゃんの間違ひなく母親似だ。そしてあたしは多分——言われたことはないけれど——父親似。ああ、どうせなら女のあたしの方こそがその幸運に与りたかった。

あたしがそう褒めるとお兄ちゃんはなんだか意味深な顔をした。そしてあたしの肩に腕を回してきた。思えばこういうスキンシップもずいぶん久しぶりだ。だってあたしが十三歳の頃には、彼はもう社会人として実家^{いえ}を出ていたんだから。仕事は激務らしく、お盆やお正月でさえあまり帰ってくることもなくなり、あたしはずいぶん淋しい想いをしたものだ。乳離れできてないなあ、と自らを戒めつつ。

お兄ちゃんがあたしを連れて行ったのは、駅すぐの複合商業タワー——最上階にあるフレンチの名店だった。あたしはさすがに戸惑った。大体飲酒年齢にも達してないのに、つまりワインも飲めないのに、こういうお店に来ていいもんだろうか。けれどお兄ちゃんは迷うことなく入店し、予約客であることを黒服の慇懃なお姉さんに告げた。彼女は世にも麗しげな笑顔を浮かべてあたしたちを窓際の席へと案内してくれた。あたしは思わずため息を漏らした。

「うわ……すごつ。超眺めいいね、さすが最上階」

お兄ちゃんは満足そうににやりと笑った。「だろ？　ここ、接待でも使ったことあるけど、眺めだけでなく味も悪くないんだ。ノンアルコールカクテルもあるから好きなの頼めよ」

好きなの、と言われても、そう簡単に指定できるほどの手の店に行き慣れてるわけじゃない。あたしは語感だけで「シンデレラ」というカクテルを頼んだ。お兄ちゃんの食前酒が同時に到着し、あたしたちはとりあえず乾杯した。

「あ、これ美味しい。オレンジとレモンとパイナップルがごちゃ混ぜになってる」

あたしは思わずごくごく喉を鳴らして飲んでしまった。お兄ちゃんはそのあたしを見て苦笑を浮かべた。

「一気飲みするもんじゃないって。ジュースじゃないんだから。ほんととお前って変わんないよな」

「もう、いちいち子ども扱いしないでよ。ていうか、電話で言つた事情……だっけ、話したいことってなに？ 超気になるんだけど。あたし予定振つてまで来たんだから、いまさらやっぱやめるなんてなしだからね」

お兄ちゃんは真顔になった。

「——やめないよ。そのためにお前呼び出したんだ。……でも、もうちょい待つて。心の準備とかあるんで」

あたしは目をぱちくりさせた。一体なんの話を始めるつもりなんだ、この人は。

「そんなシリアスな話なの？ ……聞かない方がいいかなあ」

「だめだ。逃げるなんてなしだぜ、お前も。ここに来た以上は最後まで付き合ってもらう」

お兄ちゃんは真剣な表情でそう続けた。あたしは思わず目を逸らし、曖昧に笑っていた。

その言葉の意味を理解するのは、レストランを出て数時間後のことになるのだけれど。

「もうらめえ……もう飲めないい」

あたしはぐるぐると回る頭を振りながらつぶやいた。せつかく時間をかけてセットした盛り髪が乱れるのもかまわずに。ああ、足がふわふわして、地面にちゃんと着いてないみたい。お兄ちゃんは呆れ返った様子であたしの身体を抱え上げ、近くのベンチに座らせた。ふう、と大きなため息をついている。

「お前な、なんでノンアルでそこまで酔っ払えるわけ？ 雰囲気」

酔うにしても限度つてもんがあるだろ」

「らって、お兄ちゃんがバーなんか連れてくからあ……」

レストランを出たあと、確か同じタワーに入っているお洒落なバーに入ったところまでは憶えてる。でもそこから先の記憶がほとんどない。もしかしてお兄ちゃんの大事な話つてやつもその状態で聞いちゃったんだろうか。いや、いくらなんでも、こんなへべれけのあたしを見たらその気も失せるだろう。

「仕方ないな。ほら梓沙、ちょっとだけ歩いて。すぐに休ませてやるから」

「ええ……ほんと？」

「ああ、ほんと、ほんと」

あたしはお兄ちゃんに引きずられるようにして多分二百メートルほど歩いた。なんだか可愛いネオンが目に入り、呂律の回つてない口で思わずつぶやいた。「クリスマスイルミだあ、超可愛い」

お兄ちゃんはなぜかぎくりと身体を強張らせた——けれど、そのまま、そのペンションのような建物の中にあたしを押し込んだ。あたしはぼんやりと周囲を見回した。

「なに、ここ……カフェ？」

「うん、まあ、そんなようなところ」

お兄ちゃんは財布を取り出してなにかにお金を払っている。前払い制のカフェ？　なにそれ、聞いたことないんだけど。

「梓沙……行くぞ」

妙に低い、押し殺したような声がした。あたしは抵抗するつもりもなく、おとなしくお兄ちゃんにもたれかかりながらのろのろと歩いた。できるものならどこでもいいから横になりたい、その一心でやがてマンションのドアみたいな扉の前でお兄ちゃんは止まった。

生唾を飲み込む音がかすかに聞こえた。お兄ちゃんはあたしを抱きかかえたまま、その中へと入った。

「梓沙、靴脱いで。スリッパあるから」

「んー……ちょっと待って……」

下足箱のあるカフェ？ 居酒屋みたい、と胸の中でつぶやきつつも、言われたとおりに靴を脱ぎ、スリッパを履いた。中をあらためて見回したあたしは思わず嬌声を上げていた。

「可愛い！　すごい、なにこの部屋。クリスマス仕様じゃん」

室内はちよつとしたプチホテルのようにお洒落な家具が置かれ、小ぎれいにまとめられていた。しかもそこかしこにクリスマスの雰囲気を盛り上げる小物が設置されている。サンタの形をしたルームライトや明滅するツリー、赤と緑のクリスマスカラーを組み合わせたカントリー調のベッドカバー。……ベッドカバー？

あたしの酔いが急激に醒めていった。——いや、もしかしたらこれって、気づかない振りをするべきシチュエーションなんじゃ？　だって……お兄ちゃんが、まさかそんなつもりであたしをこんな場所へ連れてくるわけがない。きつと、おそらく、いや間違いなく、正体を失くしてしまつたあたしが手に余つたために、一時避難のつもりでここへ来たんだらう。ていうか当然そうに決まつてる、だって相手は実の兄なんだから。そうやってあたしはなんとか平静を装い、ベッドに腰掛けた。

「え……えつと……あの、今日、すつごい楽しかった。でもさ、お兄ちゃん今日つてもしかして用事あつたんじゃない？」

お兄ちゃんは落ち着かない様子で窓辺に立つたまま、あたしを見つめている。

「え？　なんで」

「いや、だつて今日イブだしさ。ひよつとして彼女の都合が急に悪くなつたんであたしを代わりに呼び出したとか？　さっきのレストランとか、絶対勝負フレンチでしょ。そーいやお兄ちゃんて確か付き合つてる子いたよね、三年くらい前にちらつと聞いたような」

お兄ちゃんは黙つたまま近づいてきた。あたしの身体になぜか緊張が走つた。彼はベッドの端に腰掛けるとおもむろに切り出した。

「——逆。あいつとは別れた。もう一ヶ月くらい前に」

「えっ？　……そうだったんだ、ごめん」

あたしは神妙につぶやいた。でも——それならなんでわざわざあたしを呼び出す？ それに逆ってどういう意味なんだ？

「梓沙……聞いて欲しいことがあるんだ。俺——」

お兄ちゃんの手があたしの肩に触れた。あたしは弾かれたように立ち上がった。

「あつ、あのつ、あたし……お風呂入ってくるね。なんか寝ちやいそうだから。ごめん、お先」

あたしはあたふたとバスルームに向かった——よく考えたら、一時的に休憩してるだけなんだから、入浴するなんておかしな話だった。でもこの時はそういう思考が働かなかったのだ。

脱衣所には扉はなく、なんだか落ち着かなかったけど、一気に服を脱ぎ、浴室へ飛び込んだ。お湯を溜めながら、一方でシャワーを全開にする（これができるってことは、きつと巨大なボイラーを使ってるんだろう）。熱めのシャワーを念入りに浴び、身体を洗おうとしてボディソープを泡立てた。そして全身に泡を塗りたくった。背後に人の気配を感じたのはその時だ。あたしは突然、後ろから誰かに抱きすくめられた。

「や……え、えっ？ なに、あの、ねえ……」

あたしは混乱し、意味のない問いかけを繰り返していた。お兄ちゃんのかすれ声が聞こえた。

「梓沙……梓沙……」

お兄ちゃんは——お風呂だから当たり前と言えば当たり前なんだけど——裸だった。その汗ばんだような肌が一分の隙もなくあたしの身体に密着している。あたしは完全に固まった。……なに、これ？ どういうこと？ 冗談？ ドッキリ？

お兄ちゃんの手が前方に回り、あろうことがあたしの……あたしのバストに触れた。首筋にかかる息がどんどん熱く、荒くなっている。

「梓沙……梓沙、ああ……だめだ、俺……もう……」突然その手のひらに力が入った。

「あ、んっ」

あたしは思わずヘンな声を出してしまった。実の兄相手にだ。恥ずかしさのあまり顔が真っ赤になる。けど、羞恥を感じているのはあたし一人らしく、お兄ちゃんは興奮を隠さずにあたしの首筋を舐め、その上ぎゅうぎゅうと後ろから身体を押しつけてきた。

「や……やだ、やめて、やめてよっ」

あたしは必死で抗った。でもその声は妙に甘ったるく、まるでお兄ちゃんを誘ってるみたいに響いた。お兄ちゃんは熱っぽく囁いた。「可愛い……梓沙、めちゃくちゃ可愛い。ごめん、俺……もう我慢できない」

「が、我慢できないって……んっ……あ……お、お兄ちゃん……ねえ、お願い、やめ……やめてっば」

お兄ちゃんの細く長い指があたしの乳首を弄^{いじ}っている。意思とは裏腹に、全身から力が抜けていく。そのことに気づいたのか、お兄ちゃんはあたしをくるりと反転させた。そこにあったのは風邪をひいた時みたいに赤く潤んだ瞳だ。お兄ちゃんは短く、でもはつきりところ告げた。

「梓沙……好きだよ」

あたしはふたたび固まった。好き？ 好きってどういうこと？ あたしだってそりやお兄ちゃんのことは好きだ。だって兄妹なんだから、それにあたしは生まれた時からお兄ちゃんに面倒を看てもらってる。それなのに……好きって？ 兄として、ってこと？ じゃなく？ そんな、そんなことってあり得るの？

パニックに陥っているあたしの唇を彼は自分の唇で塞いだ。やわらかくて弾力のある唇だった。口の中にぬるりと舌が入って来、さらにその舌はあたしの舌に絡まって激しく吸い始めた。キスの経験くらいはあるけれど、こんな濃厚なのはちよつとない。お兄ちゃんの手が背中に戻され、首筋や裸のお尻を荒々しく弄り、撫で回している。そういうことを男の人にされるのは自慢じゃないけど生涯初めてだ。おまけにその上、全裸で抱き合ってるせいで、あたしの下

腹部の辺りに、ぬるぬるした熱くてものすごく硬いものが……当たって……これって、やばいんじゃないの？ やめないとまずいよね？ だって、だってあたしたち、まじで実の兄妹なんだから。

「お兄ちゃん、だ、だめだよ、ねえ、あたしのこと誰だかわかってる？ あたし、お兄ちゃんの妹だよ、血がつながってるんだよ。こんなことしちゃ……ねえ、だめだってば」

あたしは腕を突っ張らせてどうにか彼の身体を押しつけようとした。が、哀しいかな、お兄ちゃんの身長は一八〇ジャスト。あたしはというと……一五五ジャスト。その差は二十五センチ。こんな体格差では、そもそも敵うはずがない。それにあたしは、これだけが唯一の自慢というのも淋しい話だけれど、体重は四十キロあるかないかなのだ。学生時代はスポーツマンだったお兄ちゃんにしてみればちよつと重い段ボール箱、くらいの認識しかないのかもしれない。「わかってるよ。俺の大事な妹だ。……最愛の妹だ。俺はもうずっと昔からお前のことが好きだった。お前が十歳になるかならないかって頃から、ずっとそういう目で見てたんだ」

思いもかけない告白にあたしは啞然とした。お兄ちゃんはさらに言いつのつた。苦しそうで切なそうな、いままでに見たこともない顔だった。

「俺たちは十歳も年齢が離れてる。お前が十二の時、俺はすでに二十歳過ぎのいい大人だ。俺はお前が欲しくてしょうがなかった。だから家を出たんだ、過ちを犯してしまうのが怖くて」

「……嘘……」

「嘘じゃない。ここ数年はお前以外の女なんか目にも入らなかった。志保しほのこと……努力して好きになろうとしたんだ、だけど——どうしてもお前のことを考えてしまつて……これ以上自分を騙すのは無理だった。だから別れたんだ」

お兄ちゃんはそこでふたたびキスを求めてきた。あまりといえはあまりな展開にあたしはついていけず、ただ貪られるままになっていた。これって現実？ もしかして酔っ払い過ぎて意識飛んじやつ

て見てる夢とか？ 案外ほんとにそうかもしれない、だってあの人格者のお兄ちゃんが、こんな、こんな……背德的っていうの？ しちゃいけないことを自分からするわけがない。それに大体、自慢じやないけど、ていうかあたしの自慢にはならないけど、うちの一志お兄ちゃんに女に困ってない。なにもあたしみたいな平凡そのものの、しかも妹に手を出すほど飢えてるはずがないのだ。

あたしは背中にタイルの冷たさを感じた。「ひゃ……っ」いつの間にかバスルームの床に押し倒されていたのだ。混乱のあまり一瞬抵抗を忘れてしまっていたあたしの態度から、禁忌のカミングアウトを「受け入れ」たと勘違いしたのか、お兄ちゃんは心底いとおしそうな微笑を浮かべてあたしを見下ろしている。——心臓が、ずきんと疼いた。

「梓沙。……愛してる。やさしくするから」

お兄ちゃんの泡だらけの手があたしの内ももにそつと触れた。

「……っ！」

声も出ず、身体がぴくんと跳ねる。同時に戦慄が湧き起こった。

このままいけばあと数十分後ぐらいには訪れそうなおぞましい、近すぎる未来をかなり鮮やかに想像したためだ。

「ちよ、ま、たんま、待つて、無理。無理だよ、あたし」

あたしは文字どおり必死で説得を試みた。まるでふざけてるみたいに声が裏返った。お兄ちゃんは頬や首筋、耳朵に唇を這わせ、時々歯を当てたりしながら問い返してきた。

「無理ってなにが？」

「なにが、って、いまお兄ちゃんがしようとしてること！ お願いだから聞いて、あたしももちろんお兄ちゃんのこと好きだよ、大好き。子どもの頃からずっと好き。でも、それってそういうことじゃないの、お兄ちゃんはおくまでお兄ちゃんなの。エッチする相手じゃない、そうでしょ？ どうして……なんでこんなことするの、だめだよ」

目に涙が盛り上がり、眦を伝って転げ落ちた。耳の穴に水滴が入

り込む生温い感触があった。お兄ちゃんはあたしの頬を手の甲でそ
おつと拭ってくれた。あたしは堪えきれず嗚咽していた。

お兄ちゃんはゆっくりと起き上がった。そして手早くシャワーを
浴びると浴室を出て行った。どうやらあきらめてくれたみたいだっ
た。あたしは全身で大きく息を吐き出した。死にそうな疲労感がた
だただ残った。

CHAPTER 2 慟哭の大晦日・前編

「ちよつと梓沙。なんなのよそのローテンション」

これで通算三十回目くらいになるため息を聞きつけたのか、小学校以来の友人であるあかねが軽くあたしを睨んだ。あたしたちはいま某駅に隣接されたりリニューアルされたばかりのショッピングスポットに来ている。……ここって、昨夜の「現場」にかなり近いんだよね。それを思うと胃までしくしくと痛むようだった。

「ごめん。スルーして、できれば」

「無理。重すぎ。ていうか昨日デートだったんでしょ？ せっかくの合コンもキャンセルするくらいだもんね。……ねえ、つまり……ふられたの？ その彼に」

あかねは声を潜めてストレートに訊いてきた。あたしは力なく笑っていた。

「聞かせなさいよ。あんたの代わりに一人引つ張ってくんの、結構苦労したんだからね。相手の男子チームからはドタチェンで軽〜く厭味言われちゃうしさ。で？ ずいぶん最近できた彼氏よね、じゃなきゃ合コンそもそもOKしないだろうし。なのに昨日で終わりで一体どういう相手よ」

女特有の好奇心なのか、友人としての義憤なのか、あかねの目がなんだか険しい。そう迫られても絶対言えることじゃない。まじでスルーしてくれるとありがたいんだけど。

「……いや、その……誤解よ。別にデートじゃないの。なんていうか……家族会議でさ」

苦しまぎれのあたしの言葉に、あかねは案の定眉をしかめた。

「はあ？ 家族会議？ イブに？」

「うん、ほら、うち別にクリスチャンとかじゃないし。三人集まる

のに都合良い、みたいな感じで」

「うちだってばりばりの曹洞宗よ。菩提寺は永平寺よ。で、なんについでにの会議だったのよ、そんなにあんたが落ち込むような内容だったの？」

一般教養で仏教文学を専攻しているあかねらしい応酬だ。が、それ以上は答えるわけにはいかない。浮かない顔で黙り込んでいるあたしに、彼女はがらりと口調を変えて言った。

「ねえねえ、じゃあ、あんたのお兄さんもいま家に帰ってきてるってこと？ 一志さん。相変わらず恰好良かった？」

あかねの目が活き活きと輝いている。そういや彼女は小学生の頃からこんな感じで、お兄ちゃんのファンを公言していたっけ。ああ、なんだか懐かしいな。

「『府中の王子様』だもんね、一志さん。いまって都内の会社に勤めてるんでしょ？ なのに、帰ってきてるんなら、あたしも会いたかったなあ」

あたしは噴き出した。

「『府中の王子様』って、笑える。前から思ってたけど、それ一体誰がつけた渾名よ」
キヤッチフレーズ

「知らないわよ。でもあの当時は少なくともうちの近辺では有名だったよね。とにかく恰好良かったもん。高校から大学まで一貫の有名校でさ、そこでも常に首席でしょ。しかもインハイの百メートル三年連続覇者！ であの完璧過ぎるルックス。まじ無敵だよねえ一志さんて」

「……だよねえ」

あたしはつくづく彼女の賛辞に同意していた。実の妹だけれど、そういう自覚が時々なくなるほど、お兄ちゃんは隙がないのだ。隙だらけのあたしからすると違う星の人みたいな気すらする。あかねもよく、似たようなことを言っていたものだった。

「しかもその上超やさしいじゃん。あんたのことすごく可愛がって面倒看てくれてたもんね。いまでも憶えてんだけど、高一の三者面

談の時、あんたん家ってお父さんの代わりに一志さんが来たんだよね。確かお父さんが出張中だからとか、そんな理由だったと思うけど。あれはインパクトあったわ、あたしあんたのこと死ぬほど羨ましかったけど、なんかあんたじゃなくて良かったとも思っちゃったから」

あたしは苦笑した。言ってる意味が不明なようでいて、結構理解できたからだ。

「お兄ちゃんねえ、ほとんどあたしのお母さんだからね。十こも年齢離れてるしさ」

そうなのだ。あたしが0才でこの世デビューの時にお兄ちゃんはまだ小学校中学年。遊びたい盛りの男の子ながら聡明で捷く、聞き分けも面倒見もいいお兄ちゃんは、オムツ替えから食事の世話、夜泣きの相手にいたるまで、それこそ本職のベビーシッターも顔負けって感じで世話をしてくれた。あたしにもおぼろげながらその頃の記憶は残っている。だからあたしは誰よりもお兄ちゃんが好きだし、そういう意味ではもちろん愛してもいる。そういう意味っていうのは、言うまでもないけれど、家族としてやってことだ。

——昨日みたいな、お兄ちゃんが言うような意味では決してない。「でさ、一志さん来てるんなら、あたしも一回会いたいんだけど。遊び行ってもOK?」

あかねの顔が紅潮している。あたしは慌てて首を横に振った。

「いや、それがさ、今朝もう帰っちゃって。なんかかなり忙しいみたい」

「ええ? ……なんだ、残念」

露骨に落胆するあかねに済まなく思いながらも、あたしはなんだか腹立たしくなった。なんであたしがこんな自己フォローしなきゃならないんだ、まったく。

大晦日の夜、家中の大掃除を済ませたあたしは、大急ぎで手を洗うとお煮^{にじめ}の準備に取り掛かった。亡きお母さんの遺したレシピノートに載っていたメニューで、我が家のお正月の定番料理だ。もつとも、ここ数年は、食べてくれるのはお父さん一人だけになってしまってるんだけど。

材料の下ごしらえを済ませ、鍋に浮き上がる灰汁を丁寧にすくっているとお玄関の鍵が開錠される音が聞こえた。大晦日だというのに休出していたお父さんが帰ってきたのだろう。そう思って、あたしは玄関に向かった。

お帰りなさいと言おうとして、身体が固まった。

「……ただいま。出迎えつきか、気が利くな」

入ってきたのはお兄ちゃんだった。なにこともなかったみたいな顔をして靴を脱ぎ、身動きできないでいるあたしの頭を軽く撫でた。そして鼻を蠢かせている。

「いい匂いだな、なんか正月っぽい」

「あ……いま、お煮^{にじめ}作ってるから……あの……お兄ちゃん、今年は帰省しないって、確か……」

そうお父さんから聞いていた。お兄ちゃんは真顔になってあたしを見つめた。

「梓沙に会いたかったから帰ることにしたんだ。……それ以外の理由なんてない」

あたしは絶句し、後退っていた。お兄ちゃんはふと苦笑いを浮かべた。

「怖がらなくても、この前みたいに無理やり迫ったりはしないよ。」

お前のこと、傷つけたくないし。……けど……」

彼はいきなり、強い力であたしの腕を引っ張ると、胸の中に抱き寄せた。すかさず両腕で掻き抱かれ、耳元で囁かれた。

「……こうやって触るくらいならいいだろ？ エプロン姿、超可愛い。やっぱり好きだ。好きだ……梓沙、好きだ、好きだ、ああ……っ」

お兄ちゃんの息がどんどん荒くなっていく。あたしは目を瞑った。

イブの夜、バスルームで抱き合った時みたいにな、お腹の辺りに尖ったものが当たってるのがわかった。夢中で首を振り、涙声で訴えた。

「お、お兄ちゃん、離して……お願い……っ」

「キスだけ……キスだけだから」

呻くように言っただかと思つと、唇を乱暴に奪われた。必死でガードしたけれど、あつさりと唇も歯もこじ開けられ、口の中に生き物のようなお兄ちゃんの舌が入り込んでくる。そのキスははつきり言つて、この前よりもずっと激しいくらいだった。あたしは懸命に身をよじり、彼の腕から逃れようとした。だって、いつお父さんが帰ってくるかわからないっていうのに、玄関先でこんなこととして、もし見られてもしたら……我が家はその瞬間に家庭崩壊だ。頭良いくせに、どうしてそういう思考回路が働かないのか謎過ぎる。

キッチンから不穏な音がした。お煮メが嘔きこぼれたのに違いない。あたしは慌て、渾身の力を込めてお兄ちゃんの身体を引き剥がそうと試みた。お兄ちゃんはようやく唇を離してくれた。息遣いがものすごく乱れてる。

「お鍋、様子見てくるから、お願い、離して。お願い」

お兄ちゃんはじいっとあたしを凝視し、耳元に唇を近づけた。

「じゃあ、今日、俺と一緒に風呂に入るって約束する？ 梓沙」

あたしはぼかんと目を見開いた。……は？ なにそれ？

「約束するなら、その時までには触らないでいてやる。……誓えるか」

「ば……ばかなこと言わないで！ お父さんだっているんだよ、そんなの無理に決まってるじゃん。お兄ちゃん忙し過ぎて頭どうかしちゃったんじゃない」

憤然と言い返すあたしに、お兄ちゃんは悠々と言つてのけた。

「親父はいつも大晦日だけは十時半には寝ちまうだろ。子どもの頃から毎年そうだったもんな。どうする？ 約束するのか、梓沙」

鍋に張った出し汁が盛大に嘔きこぼれる音が立て続けに聞こえ、あたしは焦るあまり背いてしまった。

「わかった、約束します、するから離してつてば、お煮メだめにな

「つちゃう」

「――よし」

腕が解かれた瞬間、あたしはお兄ちゃんを突き飛ばすようにしてキッチンへとダッシュした。コンロの周辺には結構な量の薄茶色の出し汁が溜まっていた。せっかく念入りに掃除したつていうのに。あたしは思いきりため息をついた。やさしい「お母さん」だったはずのお兄ちゃんが、どうしてあんな変貌を遂げてしまったんだろう。

結局七時少し前に帰ってきたお父さんは、突然帰省してきたお兄ちゃんを見て、驚きこそしたもののすぐ嬉しそうだった。早速二人はビールを開け始めた。お父さんは上機嫌であたしを呼びつける。「梓沙、もつとつまみを持ってきたくれ。ほら、あの……鮭の剥き身を使ったやつ、あれ出来るか」

「出来るけど……」

あたしは渋った。なるべくお兄ちゃんにはお酒を勧めないで欲しい。これ以上テンションがおかしくなられたら困る。お兄ちゃんはそんなあたしの胸中を見透かしたように笑みを漏らした。

「俺もそれ食べてみたい。梓沙、料理巧いよな。母さんの味によく似てる」

そりゃそうだ。あたしのレパトリーはほとんど死んだお母さんのレシピ仕込みだもん。お父さんは嬉しそうにしきりと肯いている。弱いくせにお酒好きで、ビール一本でもう顔は真っ赤だ。

「梓沙は良い娘に育ったよなあ。気立ては良いし可愛いし、料理上手。言うことないな、な、一志。大学なんか行くより嫁に行った方がいい。そうすりゃ父さんもあいつに顔向けが立つてもんだ。それにこんな就職難の時代だ、その方が絶対利口だぞ。梓沙、お前、好きな男はいないのか？ 彼氏がないのは知ってるが」

あたしはどきまぎと顔を赤らめた。酔ったいきおいで一体なにを

言い出すかと思えば……。

「いないってそんな人。もう、お父さん少し飲みすぎだよ。お兄ちゃん、ほどほどで止めてよね」

空になった缶を片付けようとして卓上に伸ばした手をお兄ちゃんが取った。偶然触れたみたいにしたけど、明らかにわざとだ。お兄ちゃんの、ごつごつとした、細く長い指があたしの指先に絡みつく。心臓が跳ねるように騒ぎ出した。お父さんはなにも気づかず、お兄ちゃんの会社の株の話とか、次のプロジェクトの話なんかを楽しそうに振っている。散々弄られたあとでようやく解放され、あたしはやつとキッチンへ戻ることができた。なぜだか全身がぐったりしていた。

紅白が佳境に入る頃、お父さんの高聲が聞こえてきた。いつもの大晦日の情景だ。きつとりビングのソファにひっくり返ってうたた寝しちゃってるに違いない。ほんとほ毛布をかけてあげたいけど、今夜だけはそうするわけにはいかないの。……ごめんね、お父さん。

あたしはダウンコートを羽織り、バッグを手に忍び足で玄関へ向かっていった。ふたたび訪れたという寒波のせいで、天気予報によると明日の朝までは雪が降ったりして相当冷え込むらしい。でも、それでもこの家の中にいるよりよほどましだ。電気も点けずにスニーカーを捜し、足をつ込む。ブーツを履きたいところだけど、そんなごそごそと時間をかけている余裕なんてない。息を潜め、ドアノブに手をかけ、音を立てないようにゆっくりと回した。

覆い被さるみたいにして背後から抱きすくめられたのはまさにその時だった。

「……ひっ」

あたしは短い悲鳴を上げた。振り向かなくてもそれが誰かは明白だ。低い、押し殺した声がした。

「……約束、破る気が、梓沙」

あたしは泣きそうになりながらも必死で抗った。

「お……お兄ちゃん、は、離して、腕痛いよ、離してってば」

「そんな恰好でどこへ行くつもりだったんだよ。まさか、俺から逃げようとしても？　俺は約束を破るような子に育てた覚えはないけどな」

「だ……だって、あれは……それにお兄ちゃんだって約束破ったじゃない。触らないって言ったくせに、さっき、ビール片付けようとした時……」

あたしの必死の反撃は、お兄ちゃんにはまったく効いてないみたいだった。

「手が当たったって？　偶然だろ。わざとじゃないよ」

この……大嘘つき！　あたしは思わず強い口調で言っていた。

「嘘！　触り方エッチだったもん。絶対ヘンなこと考えてたくせに」
その途端、くるりと身体が反転させられ、あたしのあごにお兄ちゃんの手がかけられた。

「……ヘンなことって？　俺がどんなことを考えてたと思ってるわけ、梓沙ちゃん」

あたしはお兄ちゃんから目を逸らした。大きな切れ長の瞳は目チカラが強すぎて、見てるとなんだかくらするからだ。

「なあ。俺がどんなこと考えてると思った？　やらしいこと？　…

…あの夜の続きとか？」

顔が火照る。耳まで赤くなる。これは立派な言葉責めってやつだ。

「お前にエッチなことしたいって考えてると思ったの？　なあ梓沙、答えて。……指触られて感じてた？　もっとして欲しかった？　…

…こんな風に」

お兄ちゃんはすかさずあたしの右手を取ると、その指をくわえた。

「ひう……っ」ずきん、とお腹の底が熱くなった。な……なにこれ？

人差し指、中指、薬指に小指。丹念に吸い、舌を絡ませ、時に歯を立てる。……率直に言って、ものすごく気持ち良かった。確か

指にはいろんなツボが集まってるから、こういうことをされると快感って思うものなんだ。性的に興奮したわけじゃ絶対ない。ましてやお兄ちゃん相手に。あたしは懸命にそう言い聞かせた。

「梓沙……お前ってすげえ。見てるだけでいけそうな気がする……」
お兄ちゃんはあたしの手を口元から離すと、そろそろと腰の辺りに——ジーンズの、ジッパーのある辺りにそおっと押し付けた。心臓が止まりそうな衝撃だった。

「あ……梓沙、ほら……ここ、すげえ硬くなってるだろ、興奮してるからだぞ……お前のせいです……お前がそんなエロい顔するから……ああ……っ」

なにも聞きたくなかった。お兄ちゃんが気持ち良さそうに喘ぐ声なんてこれ以上聞きたくない。ショックで頭ががんがんする。まじで勘弁してよ、無理だってばあたし、こんなこと。

お兄ちゃんの手にはさらに力がこもった。結果的に、あたしの手のはらはもつとずつとしっかりお兄ちゃんのおそこをジーンズ越しに撫で回すことになってしまった。骨でも入ってそうな異物感。知識としては知ってるけれど、これまで付き合った男の子とは、キス以上の行為にいたったことがないため、これってまさに未知の感触としか言いようがない。いまだき十八歳で処女^{おくて}って晩熟すぎるのかもしれないけど、だからって初めての相手がお兄ちゃんなんて絶対に厭だ。涙がじわじわと込み上がった。

「や……やだ、こんなこともう……お願いだからやめて……お願いだから……」

お兄ちゃんは哀しそうに首を横に振った。

「……約束しただろ？ それにお前が厭なら無理やりはしない。少し触るだけだよ。梓沙……俺も限界なんだ。気が狂いそうなんだよ」
そう囁くと、彼はあたしの衣服を一枚ずつ脱がしにかかった。ダウンコート、ロングセーター、レギンス。そのたびに息遣いが荒くなっていく。ラベンダー色のブラとショーツ姿になったあたしを見て、お兄ちゃんは露骨に生唾を飲み込んだ。それから自分の服を手

早く脱ぎ捨てた。……あたしは目を背けた。それでも一瞬、さつきあたしの手が布越しに触れていた大きなものが見えてしまった。上向きにそそり立ってて、透明ななにかでぬるぬると光って……吐き気がした。なんで、どうして実の妹に欲情できるの？　そういうの、異常って言うんじゃないの？

「下着……取ろうか」

小声で言うなりお兄ちゃんはおあたしのブラに手を伸ばし、ホックを器用に外した。Dカップの胸がこぼれ出る。そしてショーツに手をかけた。あたしは反射的に抵抗し、ショーツの端を押さえた。

「見ないで。……自分で脱ぐ、から」

お兄ちゃんは意外なほど素直に従ってくれた。くるりと後ろを向いている間にあたしは黙ってショーツを脱いだ。

「いいよ」

お兄ちゃんはすぐに浴室の扉を押し開けた。後ろ手にあたしの手を取り、その中へと引き入れると戸を閉めた。そしてあたしをプラスチックの椅子に座らせ、シャワーノズルを握るとお湯を出した。あたしは両脚を固く閉じ、腕を交差させてできるだけ胸が見えないようにした。適温のお湯が身体にかけられた。場違いなほど懐かしい気持ちがある時蘇った。

「ちよつと前まで、俺がこうやって洗ってやってたんだよな。憶えてるか」

それはお兄ちゃんも同様だったみたいで、声のテンションが心なしか穏やかになっている。あたしは肯いた。

「ちよつと前ってことはないけど。あたしが七歳とか八歳とか、小学校低学年の頃までってことでしょ」

「俺からすりやせいぜい数年前って感覚なんだよ。……俺はずっと一緒に入ってたんだけど、親父に止められてさ。あ、別に、ヘンな意味でなくて、梓沙が自分の面倒自分で看れない子になるとまづいからって。確かに一理あるなと思ったし、それに——俺はもうそれくらいの中から、お前のこと女として見てたから。抑え利かな

くなったらやばいって思ってた」

あたしは呆れ返った。

「それくらいの時って……あたし全然子どもじゃない。なんでなの？

……お兄ちゃん、おかしいよ。異常だよ」

こんなこと言いたくはなかった。でもお兄ちゃんは怒りもせず、逆らってもせずにただ肯定した。

「だな。自分でもそう思う。俺だって散々悩んだよ、高校生の男が小学生のしかも妹に恋するなんてあり得ないってさ。こんなこと誰にも相談なんかできなかったし。親父にもし知られたら勘当もんだしな」

「ひゃんっ」

ぬるりと背中を触られ、あたしはおかしな声を上げた。ボディーツーブを念入りに泡立てた手でお兄ちゃんがあたしの身体を直接洗い始めたのだ。まるでエステティシャンみたいな手つきで丁寧に撫で回してくる。その感覚は、正直、悪いものではなかった。というよりむしろ気持ちよかった。そうしながらもお兄ちゃんは淡々と昔話を続ける。

「いちばんやばかったのはやっぱ、俺が大学三年とか四年の頃だったな。お前って結構発育が早くてさ、十一にもなる頃にはある程度身体ができあがってただろ。初潮も来て……めちゃくちゃ女っぽい顔になって。それで俺にお兄ちゃん、お兄ちゃんって懐くから、俺にとってはもう……ある種の拷問だったよ。俺はお前が好きでしよぅがなかった。十年間、ずっとお前に恋してた」

あたしはとろんとした顔でその告白を聞いていた。腕のガードが下がっていく。温泉旅館で眠る前に受けるマッサージみたいな感じ？ ああ、なんかすごく気持ちいい……寝ちゃいそう……お兄ちゃんの手が前に移動し、あたしの胸を手のひらで揉み始めた時も、すでに抵抗する気分ではなくなっていた。

「あ……ん……っ」

他人の声みたいな喘ぎ声が浴室に響いた。お兄ちゃんのかすれ声

も聞こえた。

「おっぱい感じる？ 梓沙…… たまんねえ、こんなにちっちゃい身体なのに、おっぱいだけおつきくて…… お前エロ過ぎだよ。俺のこ
と散々誘惑しやがって…… ほら、乳首ぴんぴんしてるぞ…… 気持ち
いいのか？ 梓沙…… 言ってみるよ、気持ちいいって…… ほら」

乳首をきゅつとつままれながら揉まれるその感覚に、あたしはた
まらず一際大きな声を上げた。

「あんっ…… 厭、だめ…… っ」

お兄ちゃんはおあたしの前に素早く回り込むと、膝を付いてキスを
してきた。顔が苦しげに歪んでいる。激しく舌を吸われ、唾液を流
し込まれる。あたしは反射的にそれを飲み下していた。五分ほとし
て唇を離すとお兄ちゃんはあたしを抱きしめ、囁いた。

「お前が欲しい…… お前のことを抱きたい、梓沙、俺のものになつて
いまだけでもいいから」

あたしは力なく首を横に振った。「だめ、だよ…… こんなところ
で……」 どうやら思考回路がショートしてたみたいだ。こんなところ
じゃ厭、って、それは遠まわしのYES以外のなにものでもない
お兄ちゃんの目が輝くのがわかった。後頭部をやさしく撫でながら
彼は言った。

「梓沙…… 好きだよ、梓沙。心配しないで、やさしくするから」

へっ？ …… いや、ちよつと待って、違う、あたし、言葉を選び
損ねただけで、OKしたわけじゃ——。

「…… 梓沙あ？ おーい梓沙、いないのかあ」

あたしたちは同時に硬直した。居間の方から、お父さんの寝ぼけ
たような大声が聞こえてきたからだ。お兄ちゃんは弾かれたように
あたしから離れ、泡だらけなのも忘れてそのまま浴室を飛び出した。
「お、親父、なにどうしたの？ 梓沙ならさつき風呂入ったあとに
コンビ二行くつって出てったけど」

脱衣所にはあたしの脱がされたコートが転がってるはずだ。苦し
いフオローだったけど、酔っ払ってる上に寝起きのお父さんを誤魔

化すには充分だったみたい。あたしは緊張を解き、手早くシャワーを浴びると浴槽に浸かった。すぐにお兄ちゃんが戻ってきた。ぐったりした顔をしている。

「まじびびった。いつつ朝まで起きねえくせに、なんで今日に限って……」

「……ばれたらまずいつて自覚はあるんだ」

あたしは意地悪くそんなことを言った。お兄ちゃんは睨むようにあたしを見た。

「——あるよ。でも止められない。本当にいざとなったら俺はすべて棄てるつもりでいる。お前が手に入らない世界なんて、どのみち未練ねえからな」

どきり、と心臓が鳴った。これほど激しい愛の告白、十八年の人生でも初めての経験だ。

「……あたしが妹じゃなかったらな。きつとお兄ちゃんにメロメロになつてたと思うけど」

「これからメロメロにさせてやるよ。それに妹じゃなきゃ会えなかったかもしれない。これって絶対奇蹟だぜ」

お兄ちゃんは自信満々に笑った。さすが「府中の王子様」だ。あたしはつられたように苦笑した。

CHAPTER 3 慟哭の大晦日・後編

お風呂ではしない。その代わり一緒に初詣に行こう。好きな子と行くのがずっと夢だった——そうお兄ちゃんは誘ってきた。絶対にエッチなことはしないって条件つきで、あたしはOKした。約束を守る気があるのか、甚だ怪しくも思ったけど、さすがに人目がある中では不埒なことでもないだろう。

「どうせならあたし、家族みんなで行きたいな。お父さん一人お留守番で可哀相じゃない」

それとなく言うとお兄ちゃんは露骨に厭な顔をした。

「父親同伴の初詣デートなんてあり得ないつつの。普通に考えてみるよ、異様なシチュエーションだから」

「まあね、確かに」

あたしたちがごく一般的なカップルだったなら、それはちよつと笑える光景だろう。——でもあたしたち、カップルでもないし、他人ですらないんですけど。あたしは心の中でそう付け加えた。

「親父、俺、梓沙とちよつと出てくる。初詣がてら」

「ああ、わかった。気をつけろよ、スリとか痴漢とか多いからな」

なにも知らないお父さんは、炬燵に潜り込んで手酌でお酒を飲んでいる。別にあたしを感じる必要もないはずの罪悪感にふと襲われ、胸が痛んだ。

「大丈夫、俺がついてんだから。じゃ、梓沙、行こっか」

「……うん」

あたしたちは家を出た。玄関のドアを閉めた瞬間、お兄ちゃんはあたしの手を握ってきた。子どもの頃は当たり前のようにそうしてもらっていた。あたしはお兄ちゃんがそばにいないと不安で不安で、いつも手をつないでくれるようせがんでいたものだ。

その手はいつしか離されていることが多くなり、やがて本人の姿さえ見えないようになった。あたしがいちばん淋しかったのは、小学校高学年の頃だ。自慢のお兄ちゃんはおあしのことを避けるみたいに口を利かなくなっていて、そばへ行くと逃げた。理由はわからないけれどきらわれたんだ。きつとあたしがお兄ちゃんに――いや、死んだお母さんにちつとも似てなくて、可愛くないから。お母さんは外国の女優さんみたいな美人だったもん。なのにあたしは全然そうじゃない。淋しくて、悲しくて、つらかった。親に棄てられたような気がした。

それであたしは、自ら乳離れできるよう努力したのだ。男女問わず友達をたくさん作って、休みの日にはいつも誰かしら連絡を取る相手がいるように。そうすればお兄ちゃんがない淋しさから解放されるに違いないから。実際、この目論見は結構当たっていて、高校に入る頃にはお兄ちゃんがないのが当たり前になった。棄てられた悲しさもつらさも、あたしの中から消えていった。まるで初めからそんなものなかったみたいに。

「寒くない？」

やさしい声がした。あたしははつと顔を上げた。慌てて首を横に振った。

「あ、うん、平気。いっぱい着てるから」

「そっか。……俺も寒さって感じないな。なんか逆に身体、熱い」
お兄ちゃんの頬はほんのり赤かった。アルコールなんてもうとつくに抜けてるってわかってたけど、それでもあたしは言ってみた。

「お酒飲んでたじゃん。そのせいじゃない」

「……ばあか。もしかして知ってて言ってるの？ お前がそばにいるせいでさ」

つないだ手に力が込められた。胸がきゅんと鳴った。……なんで？ あり得ないって。実の兄だって、相手。

「俺、いま、すげえ幸せ。やってること中学生みたいなんだけど、死ぬほど好きな子と一緒にいられるってまじで泣きたいくらい嬉しい

い。……こんなに誰かのこと好きになったことってないよ」

声がわずかに震えた。あたしにはなにも言えなかった。だって、あたしの「好き」とお兄ちゃんの「好き」は、量は同じかもしれないけど質が違うから。

近所の神社までの十五分ほどの距離を、あたしたちはずいぶんゆつくりと歩いた。初詣客が結構いて、こんな深夜とは思えないほど住宅街には人通りがあつた。こういう雰囲気、非日常っぽくてなんとなく好きだ。ようやく神社に到着し、鳥居をくぐって参道に入つた時、向こうからやってくる男女数人のグループを見てあたしは素っ頓狂な声を上げた。

「——あかね？ それに槇ちゃん、ケイちゃんも。遊馬もいんじゃない、超お久！」

それはあかねを含む高校時代の友人グループだった。姐御肌のあかね、甘えん坊のケイちゃん、お調子者の槇ちゃん、無口でちよつとミステリアスな遊馬。それにいちばん平凡なあたし。あたしたちはこの五人でなにかとつるんでいた。このところ誰も招集をかけなかったせいもあつてみんなの顔を見るのは春以来だ。

「なによ、梓沙、あんたちやつかり来てんじゃない。しかも一志さんと！ 今年は帰省しないなんて言つてたくせにい」

あかねはかすかに頬を染めつつあたしに絡んできた。あたしは慌てて弁明した。

「いや、あたしもそう聞いてたの。なのにお兄ちゃん、今日いきなり帰つてきちゃって」

あたしの言葉など耳にも入っていない様子で、彼女はお兄ちゃんに向かつてぴよこんとお辞儀をした。

「お久しぶりです、一志さん！ あたしのこと憶えてます？ 梓沙の友達の……」

「もちろん憶えてるよ。山代あかねちゃんだろ、小学校の時からよく家に遊びに来てた」

お兄ちゃんはそつなく優等生スマイルを拵え、そう応じた。あか

ねはたちまちのぼせ上がったように真っ赤になった。あたしはなんとなくおもしろくなかった。だってこの面子、なんであたしだけ呼ばれなかったんだろう。

「ていうか、みんなが集まるならあたしにも声かけてくれればよかったのに。ハブって感じ？ 冷たい」

すると槇ちゃんが呆れたように答えた。

「なに言ってるんだよ。俺、電話したぜ？ 携帯と実家にさ。携帯かけてもメール入れても反応ねえから家電いいでんにもかけちゃったよ。したら親父さん出て、コンビニに行ってるって言われて。お前、携帯くらい持って出るよな」

びくと肩が揺れた。それってあの時だ、お兄ちゃんとお風呂に入ってた時。あたしは慌ててコートのポケットを探った。確かに着信履歴があった。

「あ、やだ、ごめん。気づかなかったわ」

引きつった笑みを浮かべるあたし。槇ちゃんはあたしの隣に立つお兄ちゃんをまじまじと見つめた。

「あの……もしかしてこちら、伝説の『府中の王子様』？ まじでお前の兄ちゃん？ 全然似てねえし、超イケメンじゃん。へえー、あ、すいません。俺、伊田いた槇一です、菅谷の高校ん時の友達の」

槇ちゃんは調子良く頭を下げた。お兄ちゃんは相変わらず優等生スマイルを絶やさない。

「ああ、どうも。梓沙の兄の一志です。こいつ、ほんととろいからいろいろと迷惑かけてるでしょ」

そう言ってお兄ちゃんはあたしの後ろ頭を軽く小突いた。……ま

あ、確かにそのとおりなんだけど。

「いや、そんな。菅谷って料理巧いし可愛いから、一部でアイドルみたいな感じだったんですよ、高校ん時。でも本人そういう自覚ゼロなんで、なにかと俺らがフォローに回ったりしてね。な、菅谷」

あたしは苦笑した。誰がアイドルだって？ 槇ちゃんてほんと、リップサービスの帝王だ。

「ほんとですよ、あたしの好きな人、告ったらあずつちのこと好きだからごめんって言われちゃったことあったもん。あの時はまじ、超恨んだなあ」

槇ちゃんの尻馬に乗ったケイちゃんの言葉にあたしはぎよつとした。そんな昔の話、こんなとこで持ち出さなくても……。その上、彼女の肩を抱くあかねまでがこんなことを言い出した。

「こういうタイプがいちばん性質悪いのよね、自覚がないってやつ。梓沙、あんたって妙にフェロモン出てるのよ。それもね、わかりやすいのじゃなくて、地味ーに発散されてんの。知らないうちに惹き寄せちゃってんの。気をつけた方がいいわよ、そのうちやばいのが引つかかっちゃうから」

あたしは顔を引きつらせて渴いた笑いを浮かべた。お兄ちゃんはこの時一体、どういう表情を浮かべていたことか。

「ね、一志さん、あたしたちこれからカラオケ行くんですけど、もし良かったら梓沙と二人で来ませんか？ 中々こうしてみんなで集まれることってないし」

あかねはあたしを無視して直接お兄ちゃんに誘いをかけた。ひよつとしてあかねって、結構まじでおいちゃんのこと狙ってんのかなあ。

「ごめん。そうしたいとこだけど、明日、早朝から仕事で出なきゃならないんだ。悪い、せつかく誘ってくれたのに」

必殺の王子スマイルが炸裂する。断られたというのにあかねは瞳をハート型にさせ、お兄ちゃんに釘付けになっている。……ん？ 早朝から仕事？ ってことは、明日は少なくともお兄ちゃんに悩まされることはないのか。あたしはほっと胸を撫で下ろしていた。その時、意外な人と目が合った。

遊馬だ。

彼はさつきからずっと、つまらなそうに携帯を弄っていた。マイペースな彼らしい行動だ。その遊馬は携帯を閉じてブルゾンのポケットに両手をつっ込み、あたしを見つめている。なにか言いたげな

表情だった。

不意にお兄ちゃんに強く肩をつかまれた。自分の方に抱き寄せるみたいにして身体を押し付けられる。

「また梓沙に連絡してやってよ。……それじゃ、俺らも参拝してくるんで、これで」

「はいっ。お休みなさい、一志さん」

「菅谷、またな」

「あずち待つてればいいのにい。参拝なんてすぐじゃん。あずちもこのあと具合悪いの？」

あたしはろくに挨拶もできないまま、引きずられるようにして拝殿に向かった。人込みにまぎれ、彼らが見えなくなると、お兄ちゃんは大きなため息をついた。

「せっかく二人きりになれたと思ったのに。……お前って友達多いよな。昔から思ってたけど」

なんだか恨みがましい口調だった。あたしはおどおどと言いつた。

「べ、別にそんな多くないし、普通でしょ。ていうかお兄ちゃん、明日朝早いのか？　なら早めにお参り済ませて帰った方が――」

「ああ、あれ？　嘘」

あたしはぼかんと口を開けた。

「断る口実。邪魔が入らないように」

「……………なんだ」

我ながら落胆がにじみ出た声だった。それが気に入らなかったのか、お兄ちゃんはじつとあたしを見た。

「な、なに？　なんかついてる？」

「ここでキスしていい？」

あたしは目を丸くし、口をぱくぱくさせた。陳腐な比喻だけど、酸欠の金魚みたいになってやつだ。

「キスしたい。猛烈に。……あっち、あのちょっと暗くなっているとこ行こう。見られるの厭なんだろ」

お兄ちゃんはあたしの身体を抱えるようにして大股に歩き出した。あたしは足を踏ん張って必死に抵抗した。

「ちょ、ちょ、ちょっと！ 約束違反だよ。エッチなことしないって言ったじゃん」

「キスはエッチじゃないじゃん」

そうさらりと言い放つ「王子様」。あたしは、文字どおり、開いた口が塞がらない状態だ。お兄ちゃんにはっこり微笑むと、参道から外れた杉林の辺りへ強引にあたしを連れ込んだ。参拝客は誰もこんなところへは来ないし、灯りもないから相当暗い。お兄ちゃんは杉の大木にもたれるようにして立ち、あたしを正面から思いきり抱きしめた。

「……梓沙……梓沙、好きだ。死ぬほど好きだよ……」

かすれた熱っぽい囁きが聞こえ、同時にあごに手をかけられた。お兄ちゃんの顔が近づいて来、目を瞑った瞬間、強く唇を押し付けられた。舌が忍び込む。まだ。実の兄とする、もう何回目になるかわからないディープリキス。こんなのって異常だ。あり得ない。なんで相手、お兄ちゃんなの？ どこで間違っちゃったの？ どうしてあたしじゃなきゃいけないの？

それは理性の声だった。そして、どこからかわからないけれど、全然別の小さな声がなにかを囁いてるのが聞こえた。いままではまったく聞こえなかった声。甘ったるい、幼い女の子みたいな舌足らずの……気持ちいい。お兄ちゃん大好き、ねえもつとして……もつとエッチなこととして……梓沙に気持ちいいこと教えて……

気づくとあたしは舌を絡め返していた。お兄ちゃんの背中を手を回して。大好きな恋人にするみたいに。お兄ちゃんの腕にいつそう力が入り、あたしはそのまま草地の上に押し倒された。コートの中に手が忍び込み、ニットのうから胸を弄られる。……あたしは我に返った。渾身の力を込めてお兄ちゃんを突き飛ばした。

……つもりだったのに、お兄ちゃんはびくともしなかった。けど、少し驚いた顔をしてる。

「梓沙？　ここでするのが厭なら、俺のアパート行こうか。タクシ
ーなら三十分くらいだから」

「行かないっ。ここでもどこでも厭！　エッチなことしないでっ
言っただでしょ、お兄ちゃんとなんか絶対、死んだってエッチしない、
離れてよっ」

あたしは泣きながら叫んだ。誰かにこんなところ見られたらあた
しだって困るのに。お兄ちゃんはすごく傷ついたような、痛々しい
くらい哀しげな顔をした。――でも、傷ついたのはあたしも同じだ。

CHAPTER 4 二つの告白

社内に正午を告げるチャイムが鳴り響いた。一心不乱にキーボードを叩いていた一志にはその音も耳に入らないようだった。同僚の鬼頭きとうが見かねて声をかける。

「おい。……おい、菅谷。おいって」

一志ははっと顔を上げた。鬼頭は呆れたように彼を見下ろしている。

「なんか鬼気迫る雰囲気だったんだけど。お前、大丈夫か？ 正月明けからなんかまともじゃねえぞ」

「……そうかな」

彼は軽く息をつくとノートパソコンの画面を閉じた。そんな同僚に、やれやれと首を振る鬼頭。

「志保ちゃんのこと、引きずる気持ちもわかるけどさ。切り替えろよ、女はあの子だけじゃねえだろ。そりゃあんな美人はそうそういないだろうけどな」

一志は苦笑した。——ただの失恋ならどんなに楽なことか。次の恋を探せばいいだけの話だ。自分の恋は、破れようが諸共に破滅しようが、多分一生終わらない。文字どおりの棘の道だ。

二人は社屋を出、近くのレストランへ向かった。ランチタイムには破格の安さの日替わり定食を提供していて、味も中々悪くない。食欲のない一志は月見うどんを頼んだ。どのみち、どれほどの名店のシェフが腕を揮おうが、彼の妹の作る料理には敵わないのだ。

一志は深いため息を吐き出した。梓沙の泣きわめく声がまだ鮮明に聞こえる気がした。——自分の言動のせいで彼女はめちゃくちゃに傷ついただろう。だが、それでもやはり妹が恋しい。この十年と

いうもの、梓沙への熱は引くことはなく、むしろ年々激しく燃え上がり続けた。寝ても醒めても彼女の顔が脳裏から離れない。ほんのわずかにでも聞かせてくれたあまりにも甘い喘ぎが、朝な夕なに彼を責め続ける。

梓沙が欲しい。その身も心も自分のものにしたい。ほかのすべてを引き換えにしてもいい。

「……菅谷！　おい、聞いてんのか」

「えっ——」

目の前には不審そうな顔をした同僚がいた。ふわりと出汁の匂いがした。知らぬ間にオーダーした料理も到着していたらしい。

「ものすげえ思いつめた顔してたぞ。自殺直前の人間みたいな。って、俺そういう人間リアルに見たことはないけどな」

鬼頭は味噌汁をすすり込みながら言った。一志は頭を一振りすると水を飲んだ。そして箸袋から割り箸を取り出しながら訊ねた。

「悪い、なんの話だっけ」

「この前言ってたCMだよ、かせいどう華星堂の。お前、稟議書出したんだろ？　通ったのか」

「ああ……」

広告代理店の営業部に属する一志は、おもにクライアントへの企画立案を担当している。高い機動性と柔軟かつクリエイティブな発想を必要とするこの仕事は彼の性に合っており、激務ではあったがやりがいも同時に感じていた。そんな一志が現在携わっているのは、お得意様でもある大手広告主の化粧品メーカー、華星堂が打ち出す今夏の新CMの制作だった。彼は苦笑して首を横に振った。

「休み前に一度提出したんだけどな。ダメ出し喰らって、いま書き直し中だよ」

「制作費上げろって？　そりゃ普通却下だろ。クライアントが出すって言わない限りは」

「上げろとは言ってない。いま予定してるタレントを変更するように提案したただけだ」

鬼頭は噴き出した。「聞きようによっちゃその方がアグレッシブだぞ。大体、お前がそっちに変えたがってるタレント、大手事務所所属なんだろう？ ふっかけられるだろうしな。通んねえはずだよ」

一志は箸を置いた。

「微妙にブレイク前なんだよ。新鮮味があっていいだろ。新商品のコンセプトは瑞々しい果実ってことだから、大御所じゃかえってイメージに合わない。それにあの子は、あ——」

「あ？ なんだって？」

同僚の訝しげな視線を感じる。一志は間一髪でその名前を飲み込んだ。

「……ああ、だから、新しさがあるってことさ。さて、そろそろ戻るか」

一志はそそくさと腰を上げた。鬼頭はそれ以上は訊かず、コートを取り上げると彼に続いた。本社ビルへ戻る道すがら、まだなにも知らなかった頃の彼の妹の笑顔を一志は思い浮かべた。彼がこだわる少女タレントはまだ十六かそこらで、あのどこか含羞んだような表情を見せる梓沙にほんの少しだけ似ていた。

大学からそれほど離れていない駅ビル内のカフェであたしは週四日ほどバイトしてる。三時に講義が終わるとその足で電車に乗り、二つ先の駅で降りる。ターミナル駅なので乗降客も多い。足早に店へ向かい、更衣室で着替えを済ませるとそう広くもないフロアに出た。お客はまばらだった。いけないと思いつつも欠伸が出そうになる。

レトロなデザインのドアが押され、入ってきたお客を見て、あたしは声を上げた。

「——遊馬！ え、なんで？ 偶然？」

それは先日神社で会ったばかりの遊馬道みちだった。黒のライダーズ

ジャケットにジーンズ姿の遊馬は、あたしの問いに無愛想な顔で答えた。

「なわけねえだろ。聞いたんだよ、ここでバイトしてるって、山代に」

彼は案内も待たずに適当な席に座った。お兄ちゃんほどではないけど長身で、すらりと足が長いため、うちの華奢なつくりのテーブルの下に仕舞うにはいかにも窮屈そうだ。

「あかねに？　なんだ、でも来るならそうメールでもしてくれればよかったのに。びっくりしたよ」

遊馬はクール極まりない表情を浮かべてあたしをじっと見た。

「したよ。メール。見てねえの？」

「……あつ」

やばい。あたしはフリルのついたガーリーなエプロンの前ポケットを反射的に探っていた。取り出した携帯の画面は見事に真っ暗だった。

「ごめん。充電切れてた」

遊馬は肩を竦めた。

「まあ、返事なかったし、お前のことだからそんなんだろうって思ってたけど」

「ご、ごめん。でも、なんか用だった？　わざわざ来てくれるなんて。嬉しいけど」

そう訊ねるあたしに、彼は短くぼそりと告げた。

「ブレンド。あと、ここ煙草吸える？」

「えっ？　あ、だめ。店内全部禁煙なんだ」

「あそ。ならいい」

相変わらず傍若無人というか、マイペースを絵に描いたような男というか。それでも彼は怒っているわけではないのだ。あたしは苦笑しながらマスターにオーダーを通した。水出しで丹念に抽出するこの店の特製ブレンドは中々のもので、あたしも休憩中にはよくご馳走になっている。マスターがにやりながら小声で問いかけてき

た。

「梓沙ちゃんの彼氏？ 恰好いいね」

あたしは慌てて否定した。「いや、違いますって。高校ん時の友達です」

「そうなの？ いい雰囲気に見えたんだけどなあ」

いまのがか？ 思わず笑いが込み上げた。それでも敢えて反論せず、マスターからコーヒークップを受け取ると、トレイに載せて遊馬の元へサーブした。遊馬は一口啜り込むなりつぶやいた。

「ふうん……割といけんじゃん」

思ったとおりの高評価。

「でしょ？ じゃあ、ごゆつくり」あたしはにんまりと微笑み、踵を返そうとした。

「菅谷」

短く呼び止める声がした。

「ん？ なに？ あ、もしかしてミルクとか欲しかった？」

遊馬はあたしを真っ直ぐに見据え、切り出した。

「……この前神社で、お前と一緒にいた人。兄貴だって言ってたけど」

どきん、と心臓が揺れた。別にこの時点で動揺する理由なんてないんだけど。あたしは息を吸い込み、動悸を整えながら答えた。

「ああ、うん、そう。お兄ちゃんがどうかした？」

遊馬の少し釣り上がった目があたしを射抜くように捕らえた。

「ほんとにお前の兄貴？」

「——えっ？」

身体が強張った。……なに、それ？ どういう意味？

「あ……当たり前じゃん、なんで？ ああ、全然似てないから？」

それはよく言われるんだけどね、年齢も十コも離れてるし。でも真正銘、実の兄貴よ」

あたしはぎこちない笑みを浮かべてまくし立てた。しかし、遊馬は静かに核心をついてきた。

「空気ヘンだった。誰もおかしいって思わなかったみたいけど。
……お前、なんか怯えてなかった？」

「――」
言葉が出て来なかった。唇を半開きにしたまま、あたしは彼を見つめ続けた。遊馬はさらに言った。

「つつか、兄貴って目じゃなかった。普通に彼女っていうか好きな女を見る目だったよ、あの人。……だからそれがちよい気になって来ただけだ」

開いたままの唇がかさかさ^さに渴いている。あたしは露骨な音を立てて唾を飲み込んだ。そしてありったけの言葉を掻き集めた。

「あ――の、えと……いや、ば、ばかなこと言わないでよ。それジ
ョーク？ ていうか失礼だよね、他人^{ひと}ん家の兄貴に。遊馬だから赦すけど、普通怒るよ、そんなこと……言われたら……」

完全にしどろもどろだった。でも否定し切るしかない。真相を誰かに知られるなんて絶対に耐えられない。あたしがお兄ちゃんになにをされたか、そんなこと死んだって誰にも知られたくない。あたしはくるりと後ろを向き、カウンターへ戻ろうとした。その手を遊馬がつかんだ。

「な……なによ、離してよ。仕事なんだからね」

振り返ることもできなかった。あたしは消え入りそうな声でそう言った。

「ごめん。傷つけたなら謝る。……けどもしお前がなんか困ってるなら、ほっとけねえって思っ^てて。今日何時に終わる？ もうちょい話したい」

「……………」

その言葉は正直嬉しかった。でも遊馬を前にしてすべて打ち明けてしまいそうな予感がし、あたしは首を横に振った。こんなこと、誰にも言うわけにはいかない。

「いまの話したくないなら絶対もうしないよ。だから食事でも行かね？ 気分転換にさ。なにが原因にしても、ストレス抱えてんだろ、

菅谷」

あたしはひたすら黙り込んだ。そのうち、口が勝手に答えていた。
「……八時。まだ全然先だけど」

「わかった。その頃また来るから」

遊馬はかすかに微笑した——ような気がした。

一志は腕時計を見やっため息をついた。八時二十分。気づけばもうこんな時間だ。メインの仕事はなにも片付いていないというのに、一日は学生時代の三倍の速さで通り過ぎていく。伸びをし、首の凝りをほぐし、肩を鳴らす。だいぶん疲れが溜まってきたと思う。梓沙に会いさえすれば、その身体に少しでも触れられれば、こんな疲労などすぐに吹き飛ぶだろうに。

パソコンの脇に置いた私用の携帯電話を取り上げ、着信を確認する。表示はゼロだ。梓沙からの返事はない。昼過ぎからもう五件はメールを送っているというのに。

——会いたい。なにもしないから、ただ会うだけでいいから。五分でもいい。会って欲しい。その一部が嘘であることは自分でもわかっていった。身体に触れる気がないなら、実家へ赴けばいいだけの話だ。梓沙はあのマンションにいる。自分たちの父親と一緒に。さして広くもないマンションで不埒な行いに出ればすぐにすべてが発覚してしまうだろう。そうなった時、梓沙をことのほか可愛がっている父親がどれだけ激昂するか、想像に難くない。間違いなく彼女は自分から引き離され、手の届かないところへ隠されてしまうだろう。だから一志は家の外で会うことにこだわった。

梓沙を攫って、誰も知らない土地で二人きりで暮らしたい。幸い自分たちはまるで似ておらず、初対面の人間に兄妹であることを看破された経験は一度もない。子どもは作れなくても、彼女さえいてくれればそれ以上望むものなどない。

「菅谷さん、まだ残ってたんですね」

一志は飛び上がりそうになった。携帯電話を慌てて閉じ、顔を上げると、三ヶ月前に別れた水谷志保が立っていた。彼女は一志の三年後輩で、今年二十六歳になる。広報部に所属し、業種柄華やかな女子社員の多い社内でも群を抜く美女として有名な存在だ。しかしその見た目とは裏腹に控えめな性格で、特に男性に対しては晩熟と言ってもいいほど消極的だった。

「あ……ああ、まあな。片付けることばっか多くて参るわ、ほんと」
志保は微笑んだ。「菅谷さん、根詰めすぎですよ。身体壊しちゃいますよ、そのうち」

彼女は愛らしい瞳に隠し切れないとしさを湛えながら一志を見つめた。

三年前、新人歓迎会の花見の席で隣り合わせになった時、志保は一志にビールを注ぐうとして手元を誤り、彼のスーツを思いきり汚してしまったのである。彼女は泣き出しそうな顔で懸命に後始末をしたのだが、今度はつまみの入った皿を盛大にひっくり返し、その被害はまたしても一志に及んだ。平謝りに謝る彼女を見、一志は呆れるというより胸を締め付けられるような懐かしさを感じていた。志保の粗忽ぶりは、彼が長年想いを寄せ続ける実妹の仕草を彷彿とさせた。彼はふと笑っていた。——その笑顔は志保の心に甘く突き刺さった。

一カ月後に交際を申し込んだのは志保の方からだった。一志は迷ったが、結局受け入れた。梓沙を忘れられるものなら忘れたい、そういう気持ちは常にあつたからだ。

『へえ、彼女できたんだ？ 結構久しぶりじゃない？ 今度うちに連れておいでよ、あたしが隅々までチェックしたげるから』

梓沙は電話越しにそう言って笑った。どうしようもない苛立ちと切なさを堪えながら、一志は散々志保の自慢話をした。いかに彼女が美しく、利発で、淑やかで、可愛いかが。だが電話を切ったあとに襲い来る虚しさの嵐を誤魔化すことはできず、三年弱付き合いながらも実家へ彼女を連れて行くことは最後までなかった。しびれを切

らしたのか、年末に両親に会って欲しいと志保の方から切り出された時、ついに一志は別れを覚悟したのだった。

「私、お茶淹れてきますね。コーヒーでいいですか」

「え？ いや、いいよ、そんな……」

「気にしないでください。自分の分淹れるついでですから」

志保は給湯室へと赴き、ややあつて紙コップを二つ携えて戻ってきた。彼女は含羞みながら一志にコップを手渡した。一志はコップを受け取り、ゆっくりと啜り込んだ。大きく息を吐く。

「……華星堂のCMの件。うまくいってないんですか」

志保は一志の隣の椅子を引き、腰掛けた。一志は肯き、語り出した。

「……イメージの問題なんだよな。化粧品ってさ、要はイメージだろ？ 瑞々しい果実って言われて、そのタレントごとイメージが見てる人間の中にすんとって落ちてくるようじゃなきゃ失敗だと思っんだよ。それには、いま予定されてるモデルじゃだめなんだ。もっとこう、いまさっきまで木に成ってたみたいなの、思わず触りたくなるような、あ——」

彼は口元を押さえた。昼食の時とまるで同じだ。梓沙のような子じゃなくちゃだめだ、そのフレーズが頭から離れない。志保は言った。

「それが菅谷さんが押してる内田臨^{のそ}ってことですか」

「……ああ。俺は自分の直感を信じてる。これはクライアントのためにもなるはずだ」

志保はコーヒーを含み、コップを口から離すと、意味深な目で一志を見た。

「菅谷さんが携帯の待ち受けにしている女の子に似てますよね、内田臨って」

一志は絶句した。コップを取り落とさなかったのはまさに奇蹟だ。彼は呆然と志保を見た。

「ごめんなさい。さっき、声かける前に見えちゃいました。……そ

れに、前に一志さんの部屋の掃除した時、机の奥から出てきたアルバム見ちゃったんです。おんなじ女の子がたくさん写ってた。でもずいぶん小さな頃のから、高校生くらいのもで……あれって、もしかして一志さんの……」

「それ以上言わないでくれ」

一志は額に拳をついた。志保は黙ったが、すぐに口を開いた。

「私、別になにも言う気はありません。聖人君子ぶるつもりもないし。ただ、一志さん、ずっとほかに好きな子がいたんだなって思ってます。……忘れるために私と付き合ったんだってその時わかったんです。私だって本気で一志さんのこと好きだったから、それでもいいと最初は思いました。私が忘れさせてあげればいいんだって。……でも、だめでしたね……」

彼女は淋しい微笑を浮かべた。罪悪感で一志の胸がきしんだ。志保はコーヒーを飲み干すとわざと明るく立ち上がった。

「私も同感ですよ、瑞々しい果実。あれは確かに内田臨じゃなきゃ。菅谷さん、がんばって上を説得してくださいね」

そう言うのと、一志の手の中から紙コップを引き抜き、自分のものと重ねて踵を返した。颯爽と立ち去る後ろ姿は広報部の中堅OLそのもので、初めて会った頃の子どもっぽい初々しさは拭い去ったように消えていた。

八時にバイトが跳ね、着替えを終えて出てくると、ちょうど遊馬に声をかけられた。あたしたちはそれからすぐ近くにあるベトナム料理店へ行き、食事をした。そしてとりとめのない会話を交わした——高校時代の同級生や先生の話とか、お互いに通ってる大学の話とか、遊馬が夏に行ってきたってという北海道の話とか。あたしは目を輝かせた。

「いいなあ北海道、一周したの？」

遊馬はナンプラーで味付けした焼きそばを嚙り込み、肯いた。

「ああ、バイクだから身軽なもんだ。ライダーズハウスなら格安だし、こういうことができるのも学生時代だけだからな」

「そっかあ。……あたしも行ってみたいなあ」

あーんと口を開けて生春巻きをくわえようとするあたしに、遊馬はさらりと言つてのけた。

「なら行く？ 一緒に」

「へっ？」

あたしは口を閉じることも忘れてぽかんと彼を見た。遊馬がぷつと嘔き出した。

「お前、喰うなら早く喰えって。かなり笑えるぞその顔」

「……………」

ごくん、とどうにか生春巻きを飲み込んだあたしを眺めつつ彼は続ける。

「連れてつてやるよ。行ってみたいんだろ？ そうだな……いまは雪多すぎて難しいけど、六月頃とかなら花もきれいだし。礼文とか知床とかすげえいいぜ。メットは俺の貸してやるし。まあタンDEMで北海道まではちょい厳しいから、サイドカーでもつけて」

六月。ずいぶん先の話だ。あたしは言わでものをなぜかつぶやいた。

「そうだね、行けるといいな。結構先のことだけど」

「なら明日にでも行くか」

今度こそ絶句して彼を見つめるあたしに遊馬は言った。冗談ではないらしい。

「北海道じゃなく、飛行機で沖縄とかどう？ この時期あったかくていいぜ、あっちは。……お前が行きたいって言うなら連れてくよどこにでも」

あたしは固まった。遊馬の意図がわからない。遊馬はアイスコーヒーを一口飲むと、あたしをじっと見つめた。

「この際言っけど、俺、お前のこと好きだから。多分高校ん時から

ずっと。だからお前と一緒に旅行って行ってみたい。ていうかまじですごく行きたい」

遊馬の頬が照れたように赤らんでいる。そんな表情は高校時代でさえ見たことがない。本気で言ってくれてるってことはすぐにわかった。

「だから俺だけ気づいたのかもな。お前の兄貴の視線がヘンだつて……ごめん、この話しないって言ったけど、やっぱ無理だね。――

お前、なんかされたんじゃないのか。あの人に」

「やめてよ!」

あたしはうつむき、頭をなんども横に振った。両耳を押さえ、それ以上聞きたくないと意思表示する。それなのに遊馬はやめてくれない。

「やめない。お前がほんとのこと話してくれるまでは。……いや、

いまここで話せとは言わない。でももし困ってることがあるなら、俺のどこに*い*来い。俺いま実家出て一人暮らししてるから遠慮とか要らないし」

「……困ってることなんてない。お兄ちゃんは何にも、なんにもあたしにはしてない……してないってば……」

「菅谷……」

涙声になっていた。知られたくなかった。お兄ちゃんがイブに突然おかしくなつて、ラブホであたしを襲ってきたとか、大晦日に犯されそうになつたとか、そんな話打ち明けられるはずがない。だって、そんな風になつちゃつてもお兄ちゃんはあたしの大事な家族だ。あたしのことを母親代わりに面倒見てくれた大好きな家族なのだ。いつか正気に戻ってくれる日がきつと来る。そしたらその時こそ、笑って話せる。だからいまは絶対に言えない。

――もしも、いま誰かに話したら、お兄ちゃんはまるで変質者ってことになつちゃうじゃない。そんなのはあたしが厭だ。あたしさえ黙っていれば、お兄ちゃん是谁もが懂れる「府中の王子様」のまなんだから。

視界がぼやけ出した。涙が盛り上がってきたせいだ。でもあたしは拭おうとはしなかった。泣いてるわけじゃない、泣く理由なんてどこにもないもの。

「……わかった。もういいよ。ごめん」

遊馬の静かな声がした。コーヒーを飲み干すと彼は続けて言った。「さっきの話に戻す。——お前、いまフリー？」

「……うん」

あたしは肯かず、言葉だけで答えた。頭を下げたら涙がこぼれ落ちそうだったからだ。

「なら、俺と付き合って欲しい。絶対大事にするから」

真っ直ぐにあたしを見る、真摯な眼差しにぶつかった。あたしは口を開いた。でも、言葉が出て来なかった。

「——だめ、かな。好きなやつとか、いたりする？」

「……………」

首を横に振ることはできた。好きな人なんていない。うん、いない。

「ならお試してことで、どう？　一緒に遊び行ったりとか食事行ったりとか。それ以上のことはしないから。まあ、いまとほぼ同じって感じだけど」

「だって……それじゃ遊馬が……だめだよ、そんなの。遊馬の時間無駄にしちゃう。遊馬のこと、そういう風に思えるようになるかどうかかわかんないのに……」

情けない涙声だ。自分で自分に苛ついてくる。あたしってなに？　こんな弱い女だったの？　そんなあたしに、遊馬はにっと笑ってみせた。

「いんだよ。俺がつながってただけなんだから。じゃ、お試し、成立な。手始めに、明日どうか遊び行かね？　お前明日もバイトあるの？」

「明日は……ない、と思ったけど……」携帯が使えない状態なので確認ができない。

「じゃあ、なかったらさ、どこでもお前の行きたいことが、したいことか考えて、連絡して。待ってるから」

やさしくされると泣けてくる。っていうのは確かに本当のことみたいだ。堪え切れない涙がつつと頬を伝うのがわかった。もっと強くなりた。たとえば遊馬を傷つけないで済むように。あたしは無性にそう願った。

CHAPTER 5 戦慄の一夜

最寄の駅に降り立った頃には十一時半を過ぎていた。遅くはなっちやっただけ、ここから家までは歩いて五分足らずだ。

改札を抜けようとしてあたしはぎよっと立ち止まった。お兄ちゃんの姿がそこにあっただからだ。

「——何時だと思ってるんだ。一体どこに行ってたんだ、お前。来いよ、どこでなにしてたのか全部話せ」

お兄ちゃんは怒りの形相になってあたしの腕を乱暴につかんだ。

「や……っ」

あたしは小さな悲鳴を上げる。怖い。怖くて、身が竦む。でもお兄ちゃんはあたしを離してはくれず、強引に肩に腕を回すと抱きかかえるようにして歩き出した。歩調が速く、それでもコンパスの長さに差があるあたしはこけそうになってしまい、ほとんど小走りになってマンションに辿り着いた。

エレベーターに乗り込み、九階のボタンを押す。中は無人で、お兄ちゃんは当然のようにあたしのあごをつかむとキスしてきた。壁に身体を押し付けられ、逃げ場もない狭い箱の中、息詰まるような時間が三十秒ほど続いた。到着を報せるベルが鳴る。あたしは腕を引っ張られてエレベーターから降りた。

玄関のドアが開くと同時にあたしは突き飛ばされるようにして室内へ転がり込んだ。家の中は真っ暗だった。お兄ちゃんが背後から覆い被さってくる。

「梓沙……こんな時間までどこにいたんだ？ いや、誰といた？ なにをしてたんだ、全部ちゃんと話せ」

押し殺した、低い声が聞こえた。怖い。あたしは震えながら答えた。

「と、友達と……食事してただけ。でも、ちゃんと電話したよ、家

電に。メッセージも残して……」

「聞いたよ。じゃあなんで俺のメールに返事寄越さないんだ。そんなに俺がきらいか、ああ？」

「だ……だって、携帯、電池切れちゃって……だから家にも公衆電話から……」

そんなことより、なんでここにお兄ちゃんがいの？ いままで平日に帰省したことなんて一度もないくせに。そう訊きたかったけれど、怖くて口にできなかった。お兄ちゃんの腕に力がこもる。痛い、やめて、やめてよ。

「お兄ちゃん、離して、こんなところで……お父さんに見つかったちゃうよ、離してってば」

あたしは必死だった。でもお兄ちゃんは楽しそうにこう言ったのだ。

「親父は留守だぜ。急な出張だつて、九時過ぎに俺に連絡寄越したんだ。三日間家を空けるから、その間でできれば梓沙のそばにいてやってくれってさ。だからその間は二人っきりで過ごせるんだ。お前と」

血の気が引いていく。二人っきり？ 三日間も？ そんな……こんな状態で？

「梓沙……今度こそ誰にも邪魔させない。お前は俺のものだ。正真正銘、俺のものにしてやる」

脚が震え出した。助けて、厭、誰か……そう叫びたいのに声が出ない。獣みたいに荒々しい息が首筋にかかった。お兄ちゃんはあたしの身体を後ろから軽々と抱き上げた。お姫様抱っこってやつだ。そのままあたしはお兄ちゃんの部屋まで運び込まれた。履いていたミュールは廊下で転がり落ちた。ベッドの上にあたしを横たえ、すかさずお兄ちゃんは上に押し掛かってきた。唇で殴るみたいなキスをされ、齒をこじ開けられ、中に唾液を注ぎ込まれる。あたしは咽て咳き込んだ。コートを耑り取り、ニットをまくり上げてブラを無理やりずらす。お兄ちゃんは躊躇なく乳首をくわえた。

「あんっ」

あたしは思わず眉を歪めた。自分の意思とは関係なくそんな声が漏れてしまう。けど、お兄ちゃん表情はそのせいか皮肉にも少しだけやさしくなった。胸を撫で回す手のひらも、それまでより荒々しさが抜け、そつと頭を撫でるみたいな感じに変わる。「……んっ…… あ…… はあ……」厭なのに、声にもならないような甘い吐息がどンドン漏れていく。

「梓沙…… 梓沙…… 愛してる、好きだよ、愛してる……」

魘うなされたようなかすれ声。すぐく切なそうな瞳。どうしたの？

お兄ちゃん、そんな顔しないで。梓沙がいるよ、あたしはいつだってお兄ちゃんが大好き…… ぼんやりと桜色に霞む頭のどこかで、いつか聞いた女の子の甘い囁きが聞こえた。そうか、わかった。

あれはお兄ちゃんに棄すてられる前のあたしだ。

お兄ちゃんのことが好きでたまらなかった頃の。——でも、もうそんなあたしはいない。あたしはお兄ちゃんの妹で、お兄ちゃんはあたしの兄。間違っちゃだめだよ、だからお兄ちゃんもあたしから離れようとしたんでしょ？

「お兄ちゃん…… お願い、わかって、こんなこともうやめて。お願いだから、きらいにさせないで」

あたしは静かに囁いた。お兄ちゃんはいいようがないほど哀しそうな顔をしてあたしを見下ろしている。そしてふたたび唇を重ねてきた。さっきよりはずっとやさしく舌を絡ませる。ようやく唇が離れ、代わりに苦しげな声が聞こえた。

「やめられるもんならとづくにやめてる。忘れたいのは俺の方だ、どうしてお前は一日中、俺を苦しませるんだ？ 俺のことを拒むんなら俺の心の中から出てってくれ。俺だってもう限界なんだ」

胸がきしんだ。なんで、どうしてこんなことになっちゃったの？ あたしたちは当たり前前の兄妹として始まったはずなのに。それな

のに、どうしてお兄ちゃんはあたしなんかを好きになっちゃったの？

「梓沙、梓沙……っ」

お兄ちゃんはあたしの身体の上に馬乗りになってジーンズを脱ぎ始めた。あたしは目を瞑り、顔を背けた。じきに腕を引っ張られ、上体を起こされた。お兄ちゃんは言った。

「ベッドから降りて、壁に手をつくんだ」

「――」

全身が硬直した。きっと蒼白になっていたと思う。お兄ちゃんは苛々と繰り返した。

「挿^いれたりはいしない。早くしろ、これ以上我慢できない」

あたしは泣いた。子どもみたいにしゃくり上げていた。

「ごめんなさい……お願い、お兄ちゃん、お願いだから勘弁して……」

お兄ちゃんは赦してはくれなかった。あたしの腕を強く引き寄せると壁に向かって突き飛ばすように立たせた。あたしは反射的に壁にもたれかかっていた。背後から間髪入れずにお兄ちゃんが近づいてきた。彼はあたしのツイードのミニスカートをたくし上げると、乱暴にショーツを引き下ろした。あたしは泣きわめいた。

「厭……厭、厭あ……っ」

「足を少し開いて……そう、こうだ……いいよ、ああ、梓沙、その恰好たまんねえ……」

その直後、あたしの股間に――太ももの隙間に、お兄ちゃんの……あれが突っ込まれた。肩がびくんと震えるのがわかった。それは鉄かなにかみたいにもものすごく硬くて、しかも火傷しそうに熱かった。そしてクリームでも塗ったみたいになるぬるしていた。

「あああ……っ。ああ、やばい、すぐいきそう……」

深い吐息を漏らすとお兄ちゃんは腰を動かし始めた。聞いたこともないほどいやらしい声が聞こえてくる。お風呂で身体を洗う時以外、自分で触れたことすらほとんどないあたしのおそこに「それ」を密着させて前後に動き、ぐいぐいとこすり付け、右手をあたしの

腰に、そして左手を前に回してあたしの裸の胸を弄る。時折恍惚とした口調で囁く。

「めちゃくちや気持ちいい……ああ……いいよ、チ●コ気持ちいい、すげえ硬くなってる……ほら……」

正気でいられるのが不思議だった。涙も枯れるほどあたしは泣いていた。静かな部屋の中に、あたしの泣き声と、粘液がこすれ合う卑猥な音が響き渡る。そのせいでお兄ちゃんはよけいに興奮してるみたいだった。多分十分くらい経った頃、お兄ちゃんは急に緊迫した声を出した。

「あつ、あつ、いきそう、あつ、あ……ああ……っ」

股間に挟まれたものが一段と硬く大きく膨らむ感触があつた。怖くて身体が竦んだ。次の瞬間、なにか熱い液体がももの間から噴出し、脚に沿って大量に流れ落ちていった。学校のプールを思い起こさせるヘンな臭いがした。太ももの途中まで脱がされたショーツがその白い液体を受け止め、吸い上げた。あたしは肩を震わせて泣き続けた。お兄ちゃんが背後からぐったりとあたしを抱きしめる。振り払いたかったのに、その気概すらもうあたしには残ってはいなかった。

暗闇の中であたしは目を開けた。何時なのか、壁にかかっているはずの時計も見えない。あたしは、あたしを捕らえるようにして肩に巻きついていてお兄ちゃんの腕を外しにかかった。五回射精して疲れ切っているのか、起きる気配はない。三分後、やっとあたしは自由になれた。明るくなる前にこの家を出なきゃ。お兄ちゃんが起きてしまわないうちに。

床に落ちたままのコートとスカートを拾い上げると、あたしは足音を殺し、そつとお兄ちゃんの部屋を出た。そして自分の部屋に入り、着替えをする。シャワーを浴び直す余裕なんてとてもない。

「……あつ」

あたしは小さく声を上げた。携帯の充電がまだ済んでいないのだ。替えのバッテリーは持っていない。仕方ない、ほんの五分だけでもそう思つて充電器に携帯を差し込んだ。着信が五件。それに新着メールが十件。八件はお兄ちゃんからだつた。とてもじゃないけどいまは見たくない。ほかの二件のうち一件はお父さん、そしてもう一件は――遊馬だ。あたしはそのメールだけを急いで開封した。二時過ぎ、つまりほんの数時間前に届いたものだつた。

起こしたらごめん。ほんとに声が聞きたかつたけどメールにしとく。

なんかすごく会いたい。明日、ていうか今日だけど、会える？
バイトの予定つてどうだつた？

何時でもいいから連絡して。メールでも電話でもいい。

好きだよ。

涙が出そうになつた。どうしてかはわからない。きつといま、心身ともにぼろぼろだからだろう。遊馬に会いたい。だめ、会えない。こんな状態で会つたりしたらあたしはもう止まらない。すべて打ち明けてしまう。

でも会いたい。遊馬に会いたい。

「梓沙！ 梓沙！」

隣の部屋からあたしを呼ぶお兄ちゃんの声が聞こえた。心臓が止まりそうだつた。あたしは慌てて携帯をコートのポケットに仕舞い込んだ。同時に部屋のドアが破られるようないきおいで開いた。入ってくるなり、お兄ちゃんは身を縮めているあたしを抱きしめた。「勝手にいなくなるなよ。梓沙はずっと俺のそばにいなきゃだめだろ」

熱に浮かされたような声。あたしは恐る恐る言つてみた。

「で、でも、あたし今日バイトあるから、八時には出ないと」

出まかせだった。まだ確認はしていないけど、そんなに早い時間からのシフト自体存在しない。ところがお兄ちゃんは平然とこんなことを言っただけだ。

「休んで。今日はずっと一緒にいたい。風邪引いたって言えばいいよ」

あたしは哑然とした。自分の耳が信じられなかった。

「俺が電話してやるよ。保護者ですって。咽喉やられて声出ないって」

そう言うなり、すぐそばに放り出されたままのダウンコートに手を伸ばした。あたしははっとした。初詣に行った時、あたしがこのコートのポケットから携帯を取り出したところをお兄ちゃんは見ている。思わず叫んでいた。

「だめ、やだ、やめて」

すでに遅かった。お兄ちゃんはあたしの携帯を取り出し、画面を開いた。見る見るその表情が険しくなっていく。昨夜よりもっと恐ろしげな、怒りと――嫉妬の表情。

「……なんだ、このメールは。お前のこと好きだって？ 会いたいだって？ 誰だよこいつ。遊馬？」

「やめてよ、勝手に見ないで、返してっ」

あたしは必死で怒鳴った。お兄ちゃんは意にも介さない。

「遊馬って、どっかで……ああ、大晦日に神社で会った、お前の高校時代の友達の一人だな。やたら無愛想で、俺にはなんの挨拶もしなかったやつ。――言われてみれば、確かにあいつあの時、お前のことじっと見てたもんな。へえ……なるほどね」

お兄ちゃんは意地の悪い目つきであたしをじろじろとねめつけた。あたしはなんとか携帯を取り戻そうともがいた。でも腕リーチの長さでお兄ちゃんに敵うわけがない。

「まさか付き合ってたんじゃないよな？ お前、好きな男なんていないって言ってたもんな。あれは嘘じゃないだろ？」

お兄ちゃんはあたしのあごを乱暴につかんだ。あたしは顔を歪めた。

「お……お兄ちゃんには関係ないでしょ、そんなこと。携帯返してよ、プライバシーの侵害よ。それにバイトも、あたし行くから、ちゃんど。だから返し——」

て、と言い終わる前に、またしても唇を塞がれた。ねつとりとしたまわり付くような、なにかを探り出そうとするようなキス。そのままカーペットの上に押し倒され、せっかく着替えたばかりのセーターをまくり上げられ、その下に重ね着しているカットソーに手をかけられた。あたしは懸命に身をよじった。もう厭だ。あんなこと、もうあと一回だつてされたくない。

「やめて、やめてつたら！　お願い、これ以上はしないで、お願い」「だめだ。浮気心を起こした罰だよ。お前は俺のものだろ？　昨夜あれほと言つたのに……いけない子だなあ、梓沙ちゃんは」

お兄ちゃんのテンションがおかしい。いや、そもそもこんなことする辺りすでにまともじゃないんだけど。無駄だとわかっていながらもあたしは反駁せずにいられなかった。

「浮気なんかじゃないもん、あたしはお兄ちゃんの彼女じゃないでしょ！　離れてよ、離れてつたら！」

「呼び方なんかどうでもいいよ。彼女でも恋人でも。けど——浮気じゃないって？　それどういう意味？」

胸を弄っていたお兄ちゃんが低い声色で訊いた。これまでの経験からあたしの弱点が乳首だつて気づいたのか、両手を使って執拗に撫で回してくる。もつとも、あたし自身、そこが弱いなんてことは知らなかったんだけれど。

「どういうって……んっ……あっ……あ、あたしは、妹なんだから、お兄ちゃんの……だ、だから……」

心がこれほど拒否しているのに、どうして身体は反応してしまうんだろう。いまあたしの耳に聞こえる甘い嬌声は、まぎれもなく自分のものだ。声が途切れ途切れになる。それでも必死であたしは

言い続けた。

「さ、触らないで……だめ……お兄ちゃん、きらい……」

お兄ちゃんはすぐやさしい微笑を浮かべた。乳首に舌を這わせながらいとおしそうに囁く。

「子どもの頃も、怒って拗ねるとよくそんなこと言ったよな。死ぬほど可愛かった。あの頃からお前って……ああ、大好きだよ、梓沙」

お兄ちゃんの手ひらがタイツ越しに太ももをさすっている。息遣いが変わってきた。荒々しくて、つらそうな吐息。

「梓沙……梓沙、挿れたい。お前とちゃんとひとつになりたい。やさしくするよ。まだ……だめかな」

頭がぼんやりする。それでも、その行為だけは受け入れるわけにはいかない。まだもなにも、そんなの永遠に無理なんだってば。

「だめ、絶対、それだけは厭……お兄ちゃん、退いてよ、触らないでってば」

お兄ちゃんの身体がふと離れた。あきらめてくれたのだろうか。けど、それは早合点に過ぎた。お兄ちゃんはボクサーパンツを一気に脱ぐと、昨夜と同じくらい大きくなってそれを右手に持って、あたしの……あたしの顔に近づけてきた。反射的に目を瞑ったあたしの口元に、ぬるん、と信じられない感触が走った。おぞましさの全身が粟立った。

「や、や、やだっ」

あたしは怯え、涙声で叫んだ。お兄ちゃんはいっそう血走った目でそんなあたしに迫ってきた。

「挿れるのが厭なら、口でして。舌で舐めて口でしごいて、俺のこゝと気持ちよくして」

お兄ちゃんのそれが、逃げるあたしを追い回す。ガードしようとして動かしした両手はあっさりと封じ込まれ、ぬるぬるした大きなおたまじやくしみたいなものが執拗に唇にぶつかってくる。——じわじわと涙が込み上げた。だって、実の兄にエッチしない条件としてフェラチオを強要されるなんて、パニクにならない方がおかしい。

でも、なにを言ったところでお兄ちゃんは聞いてはくれないだろう。あたしは観念した。

「……やり方、わかんないよ」

涙目でお兄ちゃんを睨み、不貞腐れたみたいに言い捨てた。お兄ちゃんは興奮を隠しもせず手ほどき^{レクチャー}を始めた。

「じゃあ舌出して。そう、舌で先端のどこぺろぺろってして。……あつ、ああ、そう……ああ……っ」

恐る恐る舌を這わせ、言われたとおりにちろちろと舐める。苦し^{にが}よっぱい。途切れなくにじみ出る透明な蜜みたいなのは無味だった。よほど強い刺激だったのか、それはいきなりぴよこんと上向きに跳ねた。

「手で支えながら、裏の……筋が浮き上がってるだろ、根元の方から舐めてみて……ああ……いい、上手だよ、すげえ気持ちいい……梓沙、いいよ、ああ、もつとして……」

よがり声がどんどん大きくなる。せめてこの場に耳栓があればよかったのに。お兄ちゃんはあたしの頬や頭を撫でながら次の指示を出した。

「あ、梓沙、くわえて……口開けて、奥までくわえて、唇でしごいて」

あたしはおとなしく従った。そうすればいつそ早く終われる。でも、猛り切ったその大きな棒^{もの}は、正直あたしの口には余った。入れられないはないけれど咽喉が詰まりそうだ。なのにお兄ちゃんは無情にもあたしの頭をつかみ、前後に無理やり動かそうとし始めた。苦しさで顔が歪む。涎がこぼれ落ちる。

「ああ……っ。いい、めちゃくちゃいい……挿れてるみたい……お前のマ・コに挿れてこすってるみたい、ああ、気持ちいい、梓沙、もつと、もつと口すぼめて……」

苦しい。あごが疲れてきた。もう終わってよ、お願い。あたしはお兄ちゃんにされるがまま、頭をスライドさせ続けた。あたしの頭を押さえつける手に一段と力がこもった。お兄ちゃんが呻いた。

「あつ、あつ、出る……ああ、梓沙、出る……っ」

口の中のものが、ぐうつと膨らんだ。一秒後、その先端から、昨夜散々浴びせられたお兄ちゃんの精液がいきおい良く放出された。股間に挟んでいた時みたいに、それは口の中でびくんびくんと激しく跳ね続けている。圧迫感と気持ち悪さであたしは嘔吐いた。

「ああ……梓沙、すげえ良かったよ。……いいよ、飲まなくて、出して」

かすれ声でそう言われ、あたしはようやく解放された。カーペットの上にうずくまるようにして精液をすべて吐き出す。涎や唾液まで一緒になったどろどろの液体。洗面所まで走る余裕すらなかった。

CHAPTER 6 初めてのひと

道は携帯電話を手に取り、画面を確認した。もう正午になるというのに梓沙からの連絡は一切なかった。気持ちが昂ぶるままに送ってしまった昨夜のメールに或いはひいてしまったのだろうか。そうだとしても一目会いたい。自分の宣言どおりに友人としてでもかまわない。道は煙草に火を点け、ゆっくりと煙を燻らせた。

——梓沙と知り合ったのは、高校二年の文化祭でのことだ。学年では割と目立つ交友グループに属していた彼女のことは知ってはいたが、別段興味を抱いたこともない。ただ、美人というわけではないが素朴で可愛らしい梓沙の容姿そのものは、彼の好みだった。

だから文化祭で、調理部主催の模擬店カフェを男友達とたまたま訪れた時、メイド服姿で給仕する小柄な女生徒が誰なのかはすぐにわかった。ウェーブのかかった黒髪をヘアバンドで留め、ぎこちなく客の相手をしている梓沙の可憐さに道は目を奪われた。連れの友人は、古風ながらもぴったりとしたデザインのために際立ってしまったている彼女の形の良い胸元にばかり注目し、しきりに声をかけてはテールブルに呼びつけた。店内は盛況で、梓沙にはあちこちからお呼びがかかる。そうするうちに集中力を失くした彼女は、道のグラスにお冷やを注ぐとして手元を誤り、彼の制服のズボンを盛大に濡らしてしまったのである。

梓沙は蒼白になって道に謝った。悪知恵の働く友人の方が機先を制して、そのミスをとてに学外で会ってくれるよう彼女に迫ったのだが、それを道は止めた。いまにして思えば、梓沙に悪印象を抱かれたくない一心だったのかもしれない。

そして後日、梓沙は道の元を訪れ、先日のお詫びだと言ってパウンドケーキを渡した。ラム酒の利いた大人っぽい味わいのそのケー

キは、甘いものが苦手な道の口にも不思議とよく合った。梓沙の側に謝罪以上の意味が皆無であることは表情からわかった。——なんのことはない、道はとくに彼女に恋してしまっていたのだった。

それでも道は自覚しようとはせずにいた。知り合った時点で梓沙にはすでに交際相手がいたし、そうでなかったとしても道のことを友人としか見ていないことも厭というほど知っていたせいもある。

卒業し、進路が別れて以降、道は学業やアルバイトに忙殺される日々に没頭した。梓沙とは時々メールの遣り取りをした。……で、いま、彼氏いんの？ その一言を切り出すことはどうしてもできなかった。もしも彼女に拒否されたら。友人ですらなくなってしまうことがあまりに怖かったからだ。

だが去年、神社で再会した梓沙は様子がおかしかった。相変わらず愛らしかったが、黒目がちの瞳にはどこか怯えたような翳^{かげ}が宿っていた。彼女の隣には兄だという長身の男がいた。俳優かと思まうほど彫り深く整ったその顔立ちは、どう見ても梓沙には似ていない。それだけならまだしも、男が梓沙に向ける視線ははつきりと熱を帯びていた。それは恋情以外のなものにも見えなかった。

「——なあ、さつき菅谷と一緒にいた男ってさ……」

参拝後に訪れたカラオケ店で、道は隣席のあかねに訊ねた。曲選びに夢中になっていた彼女は、弾かれたように顔を上げた。その目は爛々と輝いている。

「一志さんでしょ？ 『府中の王子様』。超恰好いいでしょ、あたし子どもん頃からファンなのよねえ。梓沙のお兄さんで超ラッキーって感じ」

「全然似てないけど、まじで本当の兄妹？ 再婚同士の連れ子とかじゃなく？」

あかねは目を丸くしている。おかしそくに噴き出した。

「……あんたまでそんなこと言うの？ ちよっと、それ梓沙、可哀相だつて。本人もそう思っただけ確認してんだから、中学ん時」

「え？」

あかねはテーブルの上からコーラを取るとごくごく飲み下した。
「あの子さ、小学校の高学年くらいから一時期悩んだのよ。お兄ちゃんが、一志さんが冷たくなつたのはきつと自分が本当の妹じゃないからだつて。あの子が言うには、その数年つて、一志さんにほとんど無視られてたんだつて。で、なんか思いつめちゃつてね、あたしの家来てよく泣いたりしてたの。あたし、そんな悩むよりも、いつそ確認しちゃえばいいつて言っちゃつてさ。市役所行つて戸籍謄本見せてもらえば血がつながつてるかどうかわかるじゃん。それくらいの知識はあつたからさ」

彼女は苦笑しながら続けた。

「あたしもよくそんなこと無責任に言うよつてあとになつて思つたわよ。もしほんとに養女かなんかだつたらどうするのよね？ まあ、それつて結局ただの思い過ごしだつただけ」

「じゃあ本当に、実の妹？」

あかねは力強く肯いた。

「確かよ。あたしも見たもん。で、まあそれで、ある意味開き直つたみたいで。妙に交友関係広くなつたのつてそれからよね。普通にいい変化だと思つた。だつてあの子、それまではほんとお兄ちゃんつ子だつたからさ」

道は黙り込んだ。十歳年齢差のある兄の、突然の変化。大人になつた妹に対する過保護とも言える態度。梓沙の目に宿る、被虐者特有の翳。――あの二人は、おそらく多分、普通の兄妹関係ではない。そう思うといても立つてもいられなくなつた。

本人に確かめるべく彼女のバイト先まで出向き、道は確信した。

梓沙は誰にも言えずに一人で苦しんでいる。そんな風に彼女を追ひ詰めたあの男に対し、道はどす黒い憎悪が湧き上がるのを抑えられなかった。彼女が実兄から実際になにをされたのか、考えただけで気が触れそうだった。できるならいますぐに家を出て、自分の元に来て欲しい。実の妹を手籠めにする獣けだもののような男から梓沙を護りたい。

道は煙草を揉み消すと腰を上げた。メットを取り、財布をポケットに突っ込むとライダーズジャケットを羽織^{アパート}って部屋を出た。

「梓沙ちゃん？ 今日休みだよ。午後から入ってもらう予定だったけど、なんか風邪引いたってお兄さんから連絡あつてね」

梓沙がバイトしているカフェ「シヴィル」のオーナー兼マスターは暢気な口調でそう答えた。兄からの電話、と聞いて顔色を変える道に、彼は意味深な表情を浮かべた。

「君、あの子の彼氏……じゃないんだよね？ 本人は違うって言うてたけど」

道は戸惑った。「え？ ああ、まあ」

「梓沙ちゃんて、本人はまったく意識してないみたいだけど、妙に男受けいいんだよ。別に目立って美人ってわけでもないんだけどね…… 変な固定客付くこともあるから、ちょっと気をつけてやってよ君、友達なんですよ」

「……………」

マスターは苦笑を浮かべながらそう言った。言われるまでもなくわかってのことだ。赦されるなら自分が護ってやりたい。彼女に近づくすべての災厄から。

道はすぐさまカフェを出、バイクを駆って梓沙の住むマンションへと向かった。訪ねたことはないが、住所ならわかっている。脳裏の彼方に、初めて彼女と言葉を交わした時のことが思い起こされた。可愛い。やばい、まじで可愛い。柄にもなく胸がときめいた。……梓沙が好きだ。どうしようもないほど。もう誤魔化しようがないほど。

道の眉が歪んだ。本当に風邪を引いて寝込んでいるのならまだいい。しかし、もしもそれが彼女の兄の策略だったとしたら。彼女がいまこの瞬間にも、実兄から望まぬ行為を、性的暴力を受けているとしたら。

確認しなければならぬ。梓沙を悩ませる現実を。真実を。非情な信号が阻む彼女への道のりを、道は狂おしい想いでひたすら走り続けた。

午前中だけであたしは六回強要された。かろうじて膾内^{なか}に挿れられたりはしなかったけれど、お兄ちゃんはその手この手と遣り方を変えてあたしに迫ってきた。お終いには、とうとう無理やり飲まされた。むろん拒否はした。でも、口を押さえられ、力づくでそうさせられた。そのあとあたしを抱えてお風呂場に連れて行き、シャワーを浴びさせるとお兄ちゃんは少し照れたように「親子丼が食べた」と言い出した。

あたしはなにも言わずキッチンに立った。料理をさせてくれるのならそれはむしろありがたかった。でも、あたし自身にはまるで食欲なんかない。なのにお兄ちゃんは、厭がるあたしを自分の膝の上に座らせ、幼児相手にするみたいに手ずから食事をさせた。そしてしきりと子どもの頃の思い出話をした。玄関のチャイムが鳴ったのはまさにそんな時だ。

「だ……誰か来たみたい、あたし出てくるから、離して、お兄ちゃん」

お兄ちゃんは鬱陶しそうに唸った。

「いいよ、出なくて。どうせセールスかなんかだろ。ほっとけば帰るよ」

けれど来訪者はあきらめる気配を見せず、断続的にチャイムが鳴り響く。お兄ちゃんは舌打ちをし、あたしを抱えたまま立ち上がった。あたしの手を離さずにインタフォンを覗き込む。その顔色が一瞬変わった。

「……お前は部屋にいろ。いいな、絶対、出てくるなよ」

彼は怖い顔をしてそう言い棄てるなりリビングを出て行った。す

かさずあたしはインタフォンの画面を確認した。

——息を呑んだ。同時に玄関のドアが開いて、閉まる音がした。
あたしは駆け出した。

チャイムを鳴らし始めて五分も経った頃だろうか。室内から物音が聞こえ、荒々しい足音が玄関へ近づいてくるのがわかった。間髪入れずドアが開いた。

神社で会った、長身の男が現れた。モデルのように整った甘いルックスは、こうしてあらためて見ても、やはりその妹にはまったく似ていない。男の目にはあからさまな敵意があった。のみならず、道に対する激しい嫉妬。彼は後ろ手にドアを閉めると低い、押し殺した声で切り出した。

「礼儀知らずだな。他人ひとの家に押しかけてきた拳句にピンポン攻勢？ 梓沙に用なら悪いけど帰ってくれよ。いま、風邪引いて寝てるから」

道は無意識のうちに右腕を抑えつけていた。

「……あの、なら一目だけでも会っていきたいんですけど。心配なんです」

「だからさ。具合悪くて寝てるって言うてんだろ？ 帰れよ。……迷惑なんだよ」

声と眼差しに殺気がこもった。しかしそれは道とて同様だ。彼は一歩も退かず、男を睨みつけた。

「帰らない。菅谷に会うまでは。……あんた、あいつになにしたんだよ。あいつがあんな風に泣くような、他人ひとにも言えないようなこと本当にしたのか」

男の顔色が変わる。その筋肉質な腕が素早く道のジャケットから覗くシャツの襟元に伸ばされ、乱暴につかんだ。

が、彼が口を開くより先に、ドアの内側から動転したような梓沙の声が聞こえてきた。

「遊馬、遊馬なの？　そこにいるの？」道は瞠目した。直後にドアが開き、彼が恋い焦がれる少女が姿を見せた。

「菅谷！」

知らぬうちに叫んでいた。自分のものとは思えないくらい逼迫した、切ない声だった。咄嗟に駆け寄ろうとしたものの、目の前に男が立ち塞がった。彼は梓沙の身体をしつかりと抱き寄せ、遊馬から引き離そうとする。梓沙は苦しそうに身をよじった。

「離して、離してよ、お兄ちゃん」

「部屋にいろつて言っただろ！　これ以上俺を怒らせるな」

男は、梓沙の実の兄・一志は、そう怒鳴りつけるや妹の唇を乱暴に奪った。道の顔が凍りついた。

「……やめろ！」

道は我を忘れた。渾身の力を込めて梓沙の身体を一志から引き剥がすと、そのままのいきおいで一志を殴りつけた。不意を喰らい、ふらついて廊下に倒れ込んだ一志の上に馬乗りになり、その顔を立って続けに数発はった。梓沙の悲鳴が上がった。なにごとかと同階の住人が恐る恐る顔を覗かせる。道は素早く立ち上がると、梓沙の手を引いて廊下を走り、エレベーターホールへ駆け込んだ。絶妙のタイミングで到着した下りのエレベーターに二人は飛び乗ると、ロビーを抜けてマンションを出た。梓沙はパイル地の裾の短いワンピースを着ており、足元は素足にサボという有り様だったが、戻らなと問題外だ。道はライダースジャケットを脱ぐと彼女に着せ、メットを被せてバイクの後部座席に座らせた。そしてイグニッションキーを差し込み、やみくもに発進した。

二十分ほど走っただろうか。あたしはその間、遊馬の背中ですつと泣き続けていた。こんなことで泣くなんて、男の人に頼るしかできない女そのものって感じて情けないしみつともない。なのに涙は

止めようもなくあふれ続けた。……なんでこんなに弱いんだろう。
だから遊馬にまで迷惑かけちゃったんだ。

やがてバイクは一軒のアパートの前で停まった。二階建てで、小さいけれど小ぎれいな外観。遊馬はあたしの手を引き、一階の端っこの部屋のドアを開けて中に入った。ドアを閉めるなり遊馬はあたしを強く抱きしめた。

「菅谷……」

震えるような声が耳元でした。胸が、とくん、と鳴った。抗いもせずに抱かれるままになっっているあたしの顔を、彼はじっと見つめた。いつの間にかあたしは目を瞑っていた。荒い息遣い。唇に、やわらかいものがそっと触れ、じきに強く押し当てられる。すぐに舌が入り込んで来た。あたしは自分から舌を絡ませていた。

「ん……ふ……っ」

互いの声が漏れる。遊馬はすごく興奮してるみたいで、パイル地の部屋着一枚しか身につけていないあたしのお腹の辺りに、なにか硬くて大きなものがぐいぐいと当たってるのがわかった。でも、不思議なくらい厭じゃなかった。死ぬほどドキドキしてはいるけれど、お兄ちゃんに同じことをされた時とは違うドキドキだ。遊馬の手があたしの背中から、お尻の方へ下がってきた。布越しに、初めはそおっと、それからかなり大胆に手のひらで揉み回してくる。……気持ちいい。お腹の底がかあって熱くなる。遊馬が熱っぽく囁く。

「菅谷……好きだよ。めちゃくちゃ好きだ」

「……あたしも、好き。遊馬のこと、好き」

消え入りそうに小さな声だったけれど、あたしははっきりそう答えた。だって本当にそうだとわかったから。遊馬がああの部屋に来てくれた時、涙が出るくらい嬉しかった。遊馬とならどこへだって行ける。そう思っただけマンションを飛び出したんだ。

遊馬はあたしの言葉を聞くなりふたたびキスをし、自分の靴を脱ぐとあたしの身体を軽々と抱え上げ、部屋の中へ入った。シングルパイプベッドの上にあたしをそっと座らせ、ジャケットを脱がせ

て部屋着越しに胸に触れてきた。彼の興奮がより高まるのが伝わった。遊馬は生唾を飲み込んだ。

「……すげえ……やわらかい。それに大きいし……やばい、もう俺……」

「ん……あ、あん……っ」

服の上からなのに、好きな人にエッチなことをされてるって思うだけであたしはもうとろけそうだった。遊馬は素早くワンピースを脱がせ、あたしの身体をお布団の上に押し倒した。ブラはしていない。触るのに邪魔だからって理由でお兄ちゃんに禁じられたためだ。遊馬はつらそうな顔をした。

「菅谷、もう俺……途中じゃやめられない。……してもいいのか」
あたしは頬を赤らめて肯いた。

「いいよ。遊馬なら。でも……」

「でも？ なに？」

「——初めてなの、だから……その……やさしくして。……お願い」
遊馬の瞳が潤んだ。あらためて見ると、すごく澄んだ目だ。彼は肯き、すごくやさしいキスをしてくれた。

「絶対、大切にする。……愛してる、梓沙」

涙が込み上げてきた。悲しいからでも、つらいからでもないのに。そうか、人って幸せ過ぎるとほんとに泣けるもんなんだ。あたしは目を閉じた。

遊馬はやさしかった。激しかったけど、ものすごくやさしかった。
この日、生まれて初めて、あたしは遊馬に貫かれた。

CHAPTER 7 秘密の過去

菅谷寿彦^{とじろ}は出張土産の紙袋を手に、旧友の家を訪ねていた。村上産婦人科医院、と看板の出ているこじんまりとしたモダンな家屋の裏手に回り、玄関のチャイムを鳴らそうとして手を止めた。誰かが出てくる気配があつたからだ。

「ああ、やっぱりお前か。いま来るのが窓から見えてな」

ドアが開き、古い友人であり医師でもある村上博樹^{ひろき}が笑顔を浮かべながら姿を見せた。五年ぶりになるだろうか。忙しさにかまけ、このところ連絡すら途絶えていた。村上は寿彦を室内へ招じ入れ、自ら茶を入れた。人払いをさせてあるため、妙に淋しい空気が漂う。

「……どうだ？ 最近は。特に変わったこともないか」

村上はそう切り出した。紙袋を彼に押しやりながら寿彦は肯いた。

「ああ、おかげさまで。皆、変わりなく過ごしてるよ。……お前には本当、有難いと思ってる」

「会うたびに同じこと言ってるぞ。しかし……そうか。もう十八年か……梓沙ちゃんも、もう高校——」

「大学一年になる。三月生まれだからじき十九だ」

村上は感慨深げに首を振った。

「来年は成人式か。……早いもんだなあ」

寿彦は無言で茶を啜った。沈黙が降りる。やがて静かに口を開いた。

「亜沙子^{あさい}に似てきたよ。雰囲気なんかそっくりだ、料理も巧くてな。お前も、来年は会ってやってくれ」

「いいのか？ お前、彼女に——そういや上の子がいたよな、話したことはあるのか」

戸惑うような友人の問い。寿彦は即答した。

「まさか。話す気はないさ、そんな必要もない。あいつらは兄妹と

してちゃんとやってる。まあ一志には子どもの頃から面倒かけたがな、なにしろ年齢が十も離れてるだろ。ほとんど母親代わりだ」

村上は目を細めた。寿彦の上の子、一志は、確か母親似の美少年で、そうだ、当たり前だが梓沙にはちつとも似ていない。さぞ周囲からは風変わりな兄妹だと思われることだろう。

「一生、俺の胸に仕舞っておくつもりだ。墓まで持っていくてやつさ。お前に迷惑をかけないためにも」

「――世論の風潮が変わって、俺たちのしたことが認められる日が来るまでは。だろ」

二人の視線が正面から絡み合った。村上は微笑した。医師として自分が十九年前にした行いは、いまでも間違いはなかったと信じている。寿彦はあらためて頭を下げた。梓沙の実母、亜沙子の面影が不意に強く蘇った。

初めて結ばれたあと、あたしと遊馬はもう一度した。遊馬は、破瓜バジンの直後のあたしを気遣いながらも、すぐ情熱的に愛してくれた。それから日が暮れるまでもう一度。身体が離れるのが怖い気すらした。

「ごめん、シート、汚しちゃった」

あたしは申し訳ない思いでそうつぶやいた。それほどの量ではないけど出血し、染みができてしまっている。でも遊馬はものすごくやさしい顔であたしをぎゅっと抱きしめた。

「いいよ。むしろ嬉しい。ていうか誇らしい感じ。……お前がほんとに俺のものになってくれたんだなって」

涙が込み上げ、こぼれ落ちた。遊馬が好きだ。どうしてこれまでそう思わなかったのか不思議なくらい。

「……それに、ちよつと安心した。お前、あの人に最後まではされてなかったってわかったから」

あたしは肯いた。それだけはなにがなんでも必死で拒み続けたんだもの。

「……あたし、お母さんの記憶ってほとんどないんだ。写真くらいしか。すごい美人でね、全然似てないの、あたし。お兄ちゃんとも似てないから、きつともらわれっ子なんだって思ってた超悩んだりして、戸籍まで調べたりして」

遊馬はあたしの髪を撫でながら黙って聞いている。

「でも、似てないけど、やっぱり兄妹だったの。ちゃんと実子って書いてあったから。……それなのに……どうしてお兄ちゃん、あんなばかなこと考えちゃったんだろう。なにもあたしみたいな好きにならなくなたって、いくらでももつときれいな子と付き合えるのに」
去年別れたっていう彼女だって、きつと美人だったに違いない。

だって実際、お兄ちゃんはその自慢げに話してた。もう三年前の話だ。高校に入学したばかりだったあたしは、やっと兄離れが完了しかけてた頃で、お兄ちゃんの惚気話を聞いてもそれほどの淋しさは感じなくなっていた。そんな自分をすごく誇らしく思ったことをいまでも憶えてる。

「お前は可愛いよ。可愛くなきゃ惚れてない、俺、面喰いだから」
遊馬が唐突にそんなことを言い出したのであたしはきょとんとし、噴き出した。

「まじで言ってたんだよ。高2の文化祭で初めて口利いた時、あんまり可愛くてびびった。そのあとお詫びだつってケーキくれただろケーキなんかよりお前が食べたかった。俺がそんなこと思ってたなんて知らなかっただろ」

「……………」

お腹の下ら辺がきゅうんって疼いた。やばいな、あたし、遊馬に相当メロメロになってる。

「ずっと好きだった。でもお前っていつつも誰かしらと付き合ってたさ。お前のこといいって言ってる男もたくさんいたし。友達になれただけでもラッキーだって無理やり思うことにしたんだ」

瞳が潤む。遊馬が好き。遊馬にもつと愛されたい。あたしは遊馬に身体をこすりつけた。遊馬も同じようにあたしをぎゅつと抱きしめ、キスをした。部屋はもう真っ暗だった。起きて灯りを点けて、夕食の準備もしなきゃ。遊馬はなにが好きなんだろう、そう思いながらあたしは彼を求め、脚を絡ませた。

その時、チャイムが鳴った。

CHAPTER 8 不帰の記憶

あたしは反射的に身を竦めた。遊馬の顔に緊張が走る。部屋には電気は点いていないから、誰が来たにしても、このまま出ないでやり過ぎすのは不自然なことじゃない。……でも、もし……もしドアの外にいるのがお兄ちゃんだったら、それであきらめて帰ってくれるだろうか。遊馬の住所を割り出すのなんて簡単だ、だってあかねにでも電話して聞き出せばいいんだもの。

けど、あたしたちの心配は杞憂だった。ドアの外から、そのあかねの大声が聞こえてきたのだ。いや、あかねだけでなく、槇ちゃん——ケイちゃんの声まで。

「ちょっとお、遊馬あ！　いないのお？　バイクあんだからいるんでしょ、開けてよお」

「おい、遊馬！　死んでんのかよ、応答しろ」

「ねえもつかい電話してみたら？　バイクじゃなくて電車で出かけてんのかもしんじゃないじゃん」

あたしたちはそろって安堵の息を吐き出した。遊馬は立ち上がり、手早くシャツを着、ジーンズを履いた。あたしも慌てて部屋着のワンピースを着る。付き合ってるってことをみんなに報告しなきゃ、そう思っただけで遊馬のあとに続いて玄関に向かった。遊馬はドアを開けた。あたしは固まった。多分、遊馬も。

……杞憂は現実になった。三人に並ぶようにしてお兄ちゃんが立っていたのだ。

あかねはあたしの姿に相当驚いたみたいだ。遊馬の部屋にいることそれ自体より、あたしのこのラフ過ぎる恰好のためだろう。上から下までまじまじとあたしを眺め、やがてその表情は意味深な笑顔

に変わった。

「なによ、なに梓沙こんなとこにいるわけ？　しかも……ねえ、もしかしてあんたたちって……できちゃってんの？」

槇ちゃんの突っ込みがぼんやり聞こえる。

「おいおい、あかね、お兄さんもいんだぜ。そう露骨な言い方すんなって」

あたしは――吸い寄せられるように――お兄ちゃんを見た。遊馬に殴られたところが、唇の端が切れていた。どういっつもりなのか、不気味なくらい穏やかな顔をしている。彼は苦笑すら浮かべながらあたしに言った。

「梓沙、心配するだろ、いきなり飛び出してったりしたら。……遊馬君、さっきは悪かったな。俺もちよつと感情的になってしまつて」言葉が出てこない。黙ったまま立ち尽くすあたしに、あかねが説明を始めた。

「一志さんから電話もらつてさ、遊馬の住所教えてくれつて。梓沙のことで訊きたいことがあるからつて。ちょうどあたし、景子と映画観に行った帰りで、梓沙とかも呼び出そつかつて話してるとこだったから、ならみんな誘つて一緒に遊馬ん家行けば早いじゃんつてことになつて。……でも、まさかこういうことになるとはねえ。遊馬が秘密主義なのは知ってるけどさ、梓沙まで内緒にすることないじゃん、水臭いなあ」

あかねはしみじみと首を振る。あたしは、あたしと遊馬は、それどころじゃない。あたしは震えながら遊馬の後ろに隠れ、彼のシャツをぎゅつと握った。あたしの異様な様子に気づいたのか、ケイチやんが怪訝そうな顔をしている。

「あずっち、どうしたの？　なんか顔色悪い。気分悪いの？」

「え？　……そうなの、梓沙？　風邪？」

二人は遊馬越しにあたしを覗き込んだ。あたしは身を縮め、ただ首を振った。遊馬はそんなあたしを庇うようにして切り出した。

「……悪い。調子悪そうだから、みんな今日は帰ってもらえるか。」

俺、こいつについてるから」

「そんな迷惑をかけるわけにはいかない。俺が連れて帰るよ。そのために来たんだ。……おいで、梓沙」

お兄ちゃんの腕がこっちに伸ばされた。あたしは短い悲鳴を上げた。

「梓沙。わがまま言っでないで、帰らなきゃだめだ。俺が悪かったんなら謝るから」

そう言っただけ息をつくお兄ちゃん。白々しいせりふにあたしは呆れた。どうやら兄妹喧嘩の末に家を飛び出したというシナリオにでもしたいらしい。遊馬は燃えるような目で彼を睨みつけた。

「……梓沙、かなり傷ついてるんで。もう少しそつとしいてやってもらえますか。帰る気になったら俺がちゃんと送り届けますから」
助けて。いま帰ったらなにされるかわからない。助けて、遊馬。

あたしは心の中で叫び続けた。

「あ、明後日、お父さんが帰ってきたらあたしも帰る、だからお願い、今日は……今日だけは……」

消え入りそうな声を絞り出すあたしに、あかねが眉を顰めた。

「ねえ、梓沙、あんた一体……なにがあつたの？ どうしてそんなに帰るの厭がるのよ」

話すわけにはいかない。お兄ちゃんの本性をほかの人に知られるのは厭だ。その心情はあたし自身驚くほど頑なで、いまも変わらない。きつと遊馬もそのことを汲んでくれているのだらう、だから真相を暴露しないのだ。

「……帰ろうよ。まじであずっち具合悪そう。無理に連れ出すより遊馬ん家で休んだ方がいいと思う」

ケイちゃんがぼそりとつぶやいた。あたしは心の底から彼女に感謝した。

「——わかった。梓沙、明後日の夜は必ず帰って来るんだぞ」

お兄ちゃんがため息をつきながらそう言うのが聞こえた。あたしは弾かれたように顔を上げ、彼を見た。小さい頃、あたしのわがま

まをいなそうとして結局折れた時に見せる苦笑い。そんな表情をお兄ちゃんは浮かべていた。

あたしの「お母さん」だったお兄ちゃんに、もう一度戻って欲しいというのはもう叶わない願いなんだろうか。

* * *

今月三回目の合コンを終えて夜十二時過ぎに帰宅すると、妹の梓沙が駆け寄ってきた。俺は後退り、露骨に顔をしかめた。彼女は泣き出しそうな顔をした。

「……お兄ちゃん、お帰りなさい。ご飯食べた？ お風呂は？」

梓沙は健気に追いつがってくる。俺は彼女を完全に無視し、自室へ向かう。彼女の手が俺のＴシャツの裾をつかむ。俺は鬱陶しそうに言い放つ。

「放せよ。いちいちあとついて来んなって」

びくり、とその小さな手が震えた。きつとまた泣いているに違いない。俺はため息を吐き出しながらドアを開け、乱暴に閉めた。ベッドの上に身体を抛り出す。疲れと、苛立ちと、虚しさ。……梓沙へのいとしさ。どうしようもないくらいに恋心。頭を掻き毟り、無意味な舌打ちを繰り返す。

俺は実の妹に恋してる。

頭の中でそうつぶやいた。一体いつからこんなことになってしまったんだろう。自覚する頃にはもう遅かった。同じ家の中で暮らすあまりにも可憐で無防備な梓沙に襲いかかり、押し倒してしまいそんな衝動を紙一重のところどころにか抑え込む。欲望と自製の闘いで日が暮れる。さすがにもう限界だった。

来年、大学を卒業したら家を出るつもりだ。幸い就職先はすでに決まってる。新しい生活が始まれば、新しい人間関係が広がれば、きっと梓沙のこと忘れられるだろう。彼女に似たタイプの女の子にだってもしかしたら出会えるかもしれない。

でも梓沙が好きだ。梓沙以外の女なんて要らない。梓沙が欲しい。梓沙を抱きたい。梓沙。梓沙。梓沙。

ふらりと立ち上がり、壁一面に設えられたワードローブに手を伸ばす。一番下のスペースには籐のカゴが置いてあって、その中には誰にも見られるわけにはいかないものが入っている。手をつたみ、白い小さな布切れを引っ張り出す。一年前に梓沙の部屋からこっそり盗み出した、彼女の下着だ。^{パンティ}

大学ではいろんな女と手当たり次第に付き合った。同時に二人とか、時にはそういうこともあったかもしれない。でも、その子たちの誰も、梓沙とのセックスを妄想してする自慰ほどの刺激を俺に与えてはくれなかった。飾り気のない白のコットン。なんて扇情的なんだろう。清潔で愛らしい梓沙そのものだ。世界中の女がみんな裸になったところで、梓沙の魅力には敵わない。

俺は手の中の下着をまじまじと眺めた。そうするまでもなく、細部のデザインまできっちり憶え込んでしまっただけいるんだが。

——この下着を穿いた梓沙が、頬を染めながら俺に抱きつく。そして昔みたいに上目遣いの可愛い顔で囁くんだ。

お兄ちゃん……梓沙、なんだかおかしいの。身体がむずむずするの。病気なのかな……俺はやさしい兄貴らしく、穏やかな笑みを浮かべながら彼女の頭を撫でる。そして訊ねる。おかしいって？どこがむずむずするんだ？ 言ってごらん。梓沙の顔が真っ赤になって、恥ずかしそうにうつむく。そんなの……言えない。恥ずかしいよ。俺は彼女の小さなあごに手を添え、ゆっくり顔を近づける。恥

ずかしいことなんてないよ、俺たち兄妹だろ。お兄ちゃんにはなんでも言えるだろ？ ……唇を重ねても、梓沙は抵抗しない。俺のことが大好きだから。

——ファーストキスはお兄ちゃんにとって決めてたの、だから嬉しい。そんな可愛いことを言って含羞む彼女を俺は抱きしめる。梓沙の消え入りそうな声が聞こえる。お兄ちゃん……梓沙のあそこ、すぐくじんじんするの。どうしたらいいの？ 梓沙、いけない子なの？ ……俺はもうたまらず、彼女の唇を貪るようにキスを繰り返し、その華奢な身体を押し倒す。少し怯えたように身をよじらせる梓沙。でも決して拒みはしない。俺が彼女に恋してるみたいに、梓沙も俺のことをいつからか一人の男として見ていたからだ。梓沙の甘い囁き……痛くしないでね。やさしくして……ああ、可愛いよ梓沙、大好きだよ。俺の梓沙。服を脱がせ、身体中を愛撫し、そしてそのあまりに細い腰を押さえつけ、ゆっくりと挿入する。

その場面は想像するだけでも刺激が強すぎて、いつもあんまり保たない。汗が浮き、息が荒くなる。俺は梓沙の白い下着をくわえた。右手の速度を一気に上げる。

五分後、決壊が訪れた。視界がピンク色に霞む。腰が砕けそうに気持ちいい。梓沙は俺の脳の中で、一緒に絶頂を迎えてぐったりしている。白くきれいな裸体がだんだんとぼやけていく。

……………俺は異常だ。

* * *

国道沿いのファミレスに入り、喫煙席を指定するなりあかねは煙草を取り出した。喫煙を覚えたのは中学二年の夏だ。当時付き合っていた高校生の影響と、なにより、彼女が憧れてやまない一志のた

めだった。十歳も離れた友人の兄はすでに社会人で、大人の匂いがした。少しでも彼の住む世界に近づきたいとあかねは願っていた。

「あかね、禁煙するって言っただけ。肌に悪いから」

頬杖をつきながら景子がつばやいた。あかねは煙をわざと深く吸い込んでみせた。

「大量にフルーツ摂るし。平気。あんたも吸ってみる？」

景子はだるそうに首を振る。「いい。前吸ってたけど、あんま美味しくなかった。それにその頃のこと思い出しちゃうから、やめとく」

あかねは意外そうに目を見開いた。

「へえ。そうなんだ、知らなかった」

「槇ちゃんには言ったことあるかも。なんかのノリで」

「ふうん。……あいつ吸わないんだよね、意外に」

「ケチなんじゃない？ 単に、煙草代」

二人は顔を見合わせておかしそうに笑った。その槇一は、十時からコンビニのバイトがあると言って先ほど帰宅していた。

クリームがたっぷり載ったワッフルと、ヨーグルトのパフェが同時に来た。景子はぽつりと口を開いた。

「あたし中学ん時、すごい太ってたね。こういうワッフルとかパフェとか、とにかく高カロリーなもん、閑とお金があれば食べてた。なんでかわかる？」

謎かけをするような眼差しをあかねは正面から受けた。

「なんでって……好きだったんでしょ。いまでも好きじゃん、あんだ、超甘党だし」

景子は微笑した。

「いまは好きだから食べてる。……でも昔は、太るために食べてたの。太れば触られないって思ったから」

「——え？」

意味がわからず問い返すあかね。景子はゆっくりと続けた。

「お父さんがね。一時期ちょっとヘンでさ。お母さんが出てっちゃ

つてから、あたしのこと、ヘンな目で見るようになって。正直、可哀相だなんて思っ、ちよつとくらいならいいか。つて最初は思っ。……でもだんだん、エスカレートしてきてねえ、さすがにやばいっ。思っ、デブることにしたの。デブスになつちやええ。そんな氣失くすかな。思っ、

「……………」

あかねは絶句した。パフェ用の柄の長いスプーンを持つたまま、それを動かすこともできずにいる。

「ストレスもすぐて煙草吸いまくつたりしてねえ。……なんか思出しちやつたんだ、さつき、遊馬ん家であずつち見た時。あずちさあ、絶対怯えてたよ」

あかねはスプーンを置いた。妙に渴いた声が出た。

「……怯えてたっ、誰によ」

「言っ、たじやん、あずつち。明後日お父さんが帰つてきたら自分も帰るっ。だから……」

がたん、と音がした。あかねは自分でも知らぬ間に立ち上がつていた。景子はそんな彼女を静かに見ている。

「なに……なに言っ、てんのよ、ばつかじやないの？ 一志さんが……一志さんが、そんなことするわけないじやん！ あの人ね、あんたは知らないかもしれないけど、『府中の王子様』って言っ、無敵の人なんだから。そんな……梓沙に、あの人……そんな……」
言葉は蠟燭の火が揺らぐように消えていった。あかねは力なく座り込んだ。異様なまでに帰宅を拒む梓沙。兄妹喧嘩の果てに家を飛び出した、そんな風に一志は言っ、……兄妹喧嘩？ なにが原因の？

彼女は自分のせりふを反芻した。——梓沙、あんた一体、なにがあつたの？

CHAPTER 9 一度きりのさよなら

一志は一人、マンションに戻り、妹の部屋に入った。彼女が普段つけているパルファンなのか、甘酸っぱいサクランボのような香りがした。胸が締め付けられる。梓沙に触れた時に嗅いだ甘い匂い。切なくて、苦しくて、涙が出た。

どれだけ迫ろうと、無理強いしようと、梓沙は自分を受け入れてくれない。そればかりか、彼女はもうすでにほかの男のものになってしまった。梓沙の高校時代の友人である遊馬という男のものに。

一志は力なくベッドに座り込んだ。カラフルなキルトを組み合わせて作られたベッドカバーが掛けられている。これは確か梓沙のお手製だ。手芸全般が得意な彼女は、小学校中学年になる頃には編み物をマスターし、父親や一志に手袋やマフラーなどを作ってはプレゼントしていたものだ。彼女からもらったそれらの贈り物は、いまもひとつ残らず大切に仕舞ってある。一志はベッドカバーをそっと撫でた。全身が切り裂かれそうな痛みを感じた。

梓沙は自分から離れていく。昔のように無邪気に甘えて擦り寄ってくることは、もう永遠にないだろう。

一志は笑った。そのうち大声で笑い出していた。止まらなかった。梓沙と過ごしたすべての時間が鮮やかな映像となって胸の中に去来する。……こんなことになるのなら、むざむざ彼女を奪われるくらいなら、どうしてあの時、彼女が自分を必死で追いかけてきてくれた時に、想いのままに自分のものにしてしまわなかったのか。精神的に乳離れを終えてしまった梓沙の中には、もう、兄に対する憧憬などは存在しない。彼女にとって自分は、文字どおりただの兄だ。それ以上でもそれ以下でもない。梓沙の瞳はいつでもそう言っていた。

笑いが止まらない。おかしくてたまらない。俺はあの時なんて言
った？ そう、梓沙にだ。

いざとなればすべて棄てる覚悟でいる。お前が手に入らない世界
なんて、どのみち未練はない。

「……そうだな。未練なんてないな。ごめん、梓沙。最初からこう
してりゃよかったな」

そうすれば少なくともお前をあんな風に傷つけなくて済んだ。す
べて棄てる覚悟、それは嘘でも出まかせでもない。

一志は立ち上がった。真っ暗な部屋を出、ベランダのガラス扉を
開けた。梓沙が丹精した鉢植えのプランターがいくつも並んでいる。
じきに春が来れば、可愛い花を咲かせることだろう。彼は苦笑
した。最後まで――俺の世界は最後まで彼女から逃れられないのか。
ベランダの柵に脚を掛ける。地面はコンクリートだ。運悪く助か
るなんてことはまずあり得ない。

「さよなら、梓沙」

一志は目を瞑り、力を抜いた。月も星も出ていない真っ黒な空の
中に彼の身体は落ちていった。

CHAPTER 10 永遠の想い

三月十二日。あたしは十九歳になった。その報告をするため、花屋に行き、紫色の和紙に包まれた桜の花束を買った。遊馬とお父さんは外で待っていてくれた。あたしは左手に花束を抱え、もう片方の手で遊馬の手を握り、歩き出した。

「花屋に桜なんて売ってるんだな、知らなかった」

遊馬がぼそりとつぶやく。あたしは肯いた。

「……きつとお花見したがつてると思うんだ。お兄ちゃん、桜好きだったから」

あたしは空を見上げた。花曇りみたいなすつきりしない薄い水色。あたしって十九年前、きつとこんな天気の日に生まれたんだろうなあ。

「亜沙子も桜は好きだったよ。不思議だな、血もつながってないのに、そんなところが似てるなんてな」

お父さんが言った。亜沙子。それはあたしの、あたしだけのお母さんの名前。お兄ちゃんのお母さんじゃない人。——それがあたしの実のお母さんだ。

あの日、お兄ちゃんがマンションの九階のベランダから飛び降りた日、あたしはその事実をずっと知らずにいた。あたしは遊馬と一緒にいて、遊馬のことだけを見て、遊馬のことだけを考えていた。同じマンションに住んでる誰かが警察に通報してくれて、お父さんにもじきにどこからか連絡が行ったらしい。お父さんはすぐに飛んで帰ってきて、動転するまま病院に向かったそうだ。携帯を家に置きっぱにしてたあたしとは連絡が取れず、一旦家に戻ってあたしの部屋に放り出されたままの携帯を見つけるなり、電話帳を頼りに片っ端から電話をかけまくり、やがてあかね経由で遊馬の携帯に連絡

が来た。遊馬は血相を変えてあたしを連れ出した。そして二人で直接病院に駆けつけたのだった。

病院の廊下で、お父さんはあたしをいきなり抱きしめた。お兄ちゃんは今死ではなく、集中治療室に入れられていた。長い夜が更けていく中、いつしかお父さんは途切れ途切れに打ち明け話を始めた。「一志の母親には、志緒里しおりには、子どもの頃から仲のいい幼なじみがいたんだ。顔は似てないけど双子の姉妹みたいだったってよく言ってたよ。それが梓沙、お前の実の母親の亜沙子だ」

大学時代にお父さんは、その二人の女の人と知り合ったらしい。彼女たちは二人ともお父さんに恋をした。でもお父さんが好きになったのは、お兄ちゃんの母親の志緒里さんの方だった。知的で大人っぽくてきれいな志緒里さんと、少女みたいに無邪気で甘えたがりのあたしのお母さん、亜沙子さん。お父さんは大学を卒業するとすぐに志緒里さんと結婚した。でもそれが元で姉妹みたいだった二人は仲違いすることになり、それから間もなく亜沙子さんは失踪した。亜沙子さんがふたたびお父さんたちの前に姿を現したのは、それから九年後のことだ。彼女はお父さんと志緒里さん呼び出し、ある秘密の願いをした。——自分の授かった受精卵を志緒里さんに託したい。自分の代わりに出産をして欲しい。

「父さんは亜沙子を、学生時代の友人で医者をやってる知り合いのところへ連れて行った。あいつは病のために子宮を摘出していて、自分では産めない身体になってたんだ。必死で懇願してきたよ。どうしても志緒里に産んで欲しいんだと」

激しくて一途で向こう見ずな亜沙子さんは、きっと、そうすることとで子どもの父親が本当にお父さんだと思い込みたかったのかもしれない。……すごいな。その激しさってどっちかというと、あたしよりもよっぽどお兄ちゃんに近い気がする。

「国内では代理母出産は原則として禁止されてる。だが俺たちは結局、承諾した。罪滅ぼしの意識があったのかもしれない。でも十ヵ月後に梓沙、お前が生まれる頃、亜沙子はまた失踪してしまったん

だ。テレビのニュースを見て、車の事故で死んだってことがわかった。出産後二日目のことだ」

「……自殺、だったの？」

あたしは訊ねた。お父さんは曖昧に首を振った。

「わからない。そうだったのかもしれないし、本当に事故だったのかもしれない。遺書はなかったそうだから、本当のことはいまでもわからない」

とにかく、生後二日であたしは天涯孤独の身になった。父親が誰なのかは亜沙子さんは頑として言わなかったらしい。そして志緒里さんは、あたしのことを自分の実の娘として引き取りたいとお父さんに申し出たんだそうだ。

「むろん父さんもそのつもりだった。母子関係は元々、分娩の事実の有無によって認められる。だからお前は法律上は、間違いなく志緒里の娘だ。俺の娘で、一志の……妹だ」

お父さんはそこまで言うと言顔を覆った。悲痛な声で続けた。

「……薄々気づいてたんだ、あいつが、一志がなにかに悩んでることを。お前に対する態度がおかしいってことも。でも父さんは話せずにいた。せつかくここまで築いてきた家族関係を、自分の一言で壊してしまうのが怖かったんだ。そんなのはきつと志緒里の望むことじゃない。志緒里が、お前を産んで二年後に癌で亡くなってから、父さんにとってはお前はあいつの忘れ形見みたいなもんだった。亜沙子の娘だなんて認識はとうに消えてた」

お父さんのすすり泣きが聞こえた。記憶にある限り、お父さんが泣くのなんてあたしは初めて見た。

「もしも話していれば、一志はここまで思いつめることはなかっただろうに。お前とは血がつながっていないって、それさえ知れば……こんなことにはならなかったかもしれないのに……」

お父さんは一晩中泣いていた。あたしはなぜか泣けなかった。突然過ぎて、衝撃が大きすぎて、涙腺の調整が壊れてしまったのかもしれない。あたしはただぼんやりと長椅子に座っていた。遊馬はそ

んなあたしの肩をずつつと抱いていてくれた。

病院に着くと、ロビーで、志保さんに声をかけられた。ほんのり薄化粧程度なのに相変わらずごくきれいだ。

彼女の隣には、お兄ちゃんの同僚の男の人がいた。確か名前は鬼頭さんって言ったかな。あたしたちはお互いに軽く一礼した。

「ありがとう。済まないね、志保さん。いつ目が醒めるかもわからないのに、こんなに一生懸命……」

お父さんの声が潤んだ。志保さんは微笑み、首を横に振った。

「いえ、私がそうしたいんです。できれば一志さんが目を醒ました時、誰よりもそばにいたいんで」

彼女は初々しく頬を赤らめた。鬼頭さんは揶揄するように言った。「志保ちゃんみたいな子がそばにいりゃ、厭でも起きるさ。もう寝続けるのにもいい加減飽きて、そろそろ起きようって思ってるところかもしれない。ねえ、お父さん」

お父さんは眦をこすりながら肯いた。

——お兄ちゃんはどうにか一命を取りとめたあと、昏睡状態に陥った。そしてそのまま、遷延性意識障害と診断された。主治医の先生によると、この症状が三ヶ月以上続くといわゆる植物状態と看做されるらしい。仮に意識を取り戻したとしても、重い後遺症は回避できないだろう。

そう宣告されても志保さんはお兄ちゃんを見捨てなかった。会社に連絡が行ったその日からほぼ毎日のように病室を訪れ、足りないものを買いつけたり、清拭の手伝いをしたりして甲斐甲斐しくお兄ちゃんの世話をした。お父さんは心底彼女に感謝しながらも、しきりに申し訳なさそうな顔をしていた。理由はこもこも、わかる気がした。あたしは以前、志保さんにこう言われた。

「一志さんが手がけてた華星堂の今夏のCM、六月頃には流れるはずだから、ぜひ観てね。メインに使ってるタレントの内田臨ちゃん、あなたによく似てるから」

あたしは目をぱちくりさせた。内田臨って、読モ出身のいま結構

話題の子？ 隣にいた遊馬が切り返した。

「似てませんよ。梓沙の方が可愛い」

彼女はぶつと噴き出した。そしてふとつぶやいた。

「……一志さんもきつとそう思ってるわ。でも、憶えといてね。私もう絶対、あきらめたりしないから」

挑むような目がものすごくきれいだと思った。お兄ちゃんは、もしも目を開けたら、今度こそちゃんと志保さんのことを好きになれるかもしれない。そんな気がした。

EPILOGUE

散り始めた桜の花びらが一枚、ひらひら舞って梓沙の頭の上に落ちた。俺は笑って手を伸ばし、それをつまみあげた。

「ほら、梓沙、お前と一緒に花見したいってさ」

そう言っていると梓沙は目を輝かせて俺に抱きついてきた。そして抱っこをせがんで上目遣いに俺を見る。その眼差しが可愛くてたまらない。俺は彼女を軽々抱き上げた。

「お兄ちゃん、だいすき、だいすき」

頸に手を回して頬ずりをする。乳臭いような甘い匂い。父さんは呆れたようにそんな俺たちを見ている。

「俺よりもお前の方がよっぽど親みたいだなあ、梓沙の。梓沙、お父さんも抱っこしてやるから、ほら、おいで」

しかし梓沙は可愛らしく舌を出してそれを拒否した。ごめん、父さん。

「……ショックだな。梓沙、そんなにお兄ちゃんがいいのか？ ならいっそ、大きくなったらお兄ちゃんのお嫁さんになるか」

梓沙は当然のように肯いた。

「うん、なる。あずさ、お兄ちゃんのおよめさんね。お兄ちゃんとケッコンするの」

口もろくに回らないくせに。俺は苦笑いした。実際、学校の友達にはシスコンで有名なんだ、俺は。

でもいい。梓沙は可愛いんだから。そのうち、淋しいけど俺から離れていく日も来るだろう。女の子なんてすぐに大きくなるって言うしな。でも、俺に懐いてくれるうちは俺の梓沙だ。

途切れなく舞い降りる、まるでライスシャワーみたいな桜の花びらが、梓沙の上にこぼれ落ちていく。俺は彼女の頭にもう一度手を

伸ばした。

お兄ちゃん。どこかで聞いたような懐かしい女の子の声でした。

EPILOGUE (後書き)

「朝な夕なに」、終了いたしました。

視点がころころ変わる上、行間詰まりまくりの読みにくい文章。にもかかわらず最後までお付き合いいただいた方、本当にありがとうございます。

なお、自分としてはこれで完結だと思っていたのですが、続編を希望してくださる方もおられ、またうつすらとネタらしきものが湧いてきたこともあり、彼らの「その後」について書いてみようかと思っています。

時間軸としては一志の自殺未遂から一年後の春。多分、病室で目を覚ますところから始まるかと。

無事に発表できた暁には、お読みいただけると大変うれしいです m

——— m

追記……続編「エリュシオン」及び番外編「淡雪」掲載中です。

よろしければぜひご一読ください。また、ご意見ご感想、心よりお待ちしております (^^)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5782j/>

朝な夕なに

2011年5月22日18時10分発行